

(3) 代謝物

① 代謝物 の細菌を用いた復帰突然変異試験

(資料No. 49)

試験機関 : (GLP 対応)
報告書作成年 : 1989 年

検体純度 : %

試験方法 : ヒスチジン要求性のサルモネラ菌 TA1535、TA1537、TA98、TA100 株及びトリプトファン要求性の大腸菌 WP2uvrA 株の 5 菌株を用い、代謝活性化系 (S-9Mix) の存在下及び非存下で Ames らの方法を用いてプレート法にて復帰変異原性を調べた。検体はジメチルスルホオキシド (DMSO) に溶解して、0、313、625、1250、2500 および 5000 μg /プレートの濃度で処理した。結果の判定は復帰変異コロニー数が溶媒対照値の 2 倍以上で、用量依存性が認められた場合に陽性とした。

陽性対照物質として 2-(2-フリル)-3-(5-ニトロ-2-フリル)アクリルアミド (AF-2)、アジ化ナトリウム (NaN_3)、2-メトキシ-6-クロロ-9-[3-(2-クロロエチル)-アミノプロピルアミノ]アクリジン・2HCl (ICR-191) および 2-アミノアントラセン (2AA) を用いた。

用量設定根拠 ; 100、500、1000、2000 および 5000 μg /プレートの濃度において本試験と同様の方法で用量設定試験を実施した。その結果最高用量においても菌に対する生育阻害作用が認められなかったので本試験における最高濃度は 5000 μg /プレートに設定した。

結果 : 表 1 に本試験結果を、表 2 に用量設定試験結果を示す。

表 1 および 2 に示すように、検体処理プレートにおいてはいずれの菌株でも S-9Mix の存在の有無に関わらず対照プレートと比べ、復帰変異コロニー数の増加はみられなかった。一方、陽性対照物質を処理したプレートでは著明な復帰変異コロニー数の増加がみられた。

以上の結果から、本試験条件下において本剤は、代謝活性化の有無にかかわらず、復帰変異誘発性を有しないものと判断された。

表1. 本試験結果

薬物	濃度 ($\mu\text{g}/\text{プレート}$)	S-9Mix の有無	復帰変異コロニー数/プレート				
			塩基対置換型			フレームシフト型	
			TA1535	TA100	WP2uvrA	TA1537	TA98
溶媒対照 (DMSO)	—	—	6	91	41	8	20
検体	313	—	7	118	38	9	26
	625	—	8	122	45	5	28
	1250	—	5	140	45	6	25
	2500	—	8	127	42	3	22
	5000	—	6	92	43	11	26
溶媒対照 (DMSO)	—	+	9	91	63	13	28
検体	313	+	7	97	48	17	31
	625	+	7	104	51	14	30
	1250	+	3	89	56	20	27
	2500	+	7	97	52	15	26
	5000	+	6	84	69	13	27
陽性対照	NaN ₃	0.5	—	257			
	AF-2	0.01	—		438	377	
		0.1	—				713
	ICR-191	1	—				942
	2AA	0.5 1 2 20	+	280	982	1369	172 447

表中の値は2枚のプレートの平均値

NaN₃: アジ化ナトリウム AF-2: 2-(2-フリル)-3-(5-ニトロ-2-フリル)アクリルアミド

ICR-191: 2-メトキシ-6-クロロ-9-[3-(2-クロロエチル)-アミノブロビニアミノ]アクリシン・2HCl

2AA: 2-アミノアントラセン

表2. 用量設定試験結果

薬物	濃度 ($\mu\text{g}/\text{プレート}$)	S~9Mix の有無	復帰変異コロニー数/プレート				
			塩基対置換型			フレームシフト型	
			TA1535	TA100	WP2uvrA	TA1537	TA98
溶媒対照 (DMSO)	—	—	7	111	36	6	18
検体	100	—	7	115	37	6	16
	500	—	7	101	44	7	16
	1000	—	7	111	28	6	19
	2000	—	6	123	41	5	19
	5000	—	7	111	40	5	19
溶媒対照 (DMSO)	—	+	8	120	48	15	27
検体	100	+	7	117	46	17	26
	500	+	6	100	56	14	25
	1000	+	8	95	50	10	26
	2000	+	7	109	49	10	28
	5000	+	7	97	46	9	30
陽性対照	NaN ₃	0.5	—	275			
	AF-2	0.01	—		494	353	
		0.1	—				709
	ICR-191	1	—				796
	2AA	0.5	+				308
		1	+				
		2	+	320	1224		212
		20	+			1299	

表中の値は2枚のプレートの平均値

NaN₃: アジ化ナトリウム AF-2: 2-(2-フリル)-3-(5-ニトロ-2-フリル)アクリルアミド

ICR-191: 2-メトキシ-6-クロロ-9-[3-(2-クロエチル)-アミノブチルアミノ]アクリジン・2HCl

2AA: 2-アミノアントラセン

3. 製剤

(1) 0.07%粒剤

① ラットにおける急性経口毒性試験

(資料No. 9)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 0.070%
鉱物質微粉等 99.93%

供試動物 : SD 系 (CD) ラット、6-8 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 130-144g 雌 112-124g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

試験方法 : LD₅₀ 値算出

投与方法 : 検体を蒸留水に懸濁させ、胃ゾンデを用いて単回強制経口投与した。投与容量は 10 ml/kg とした。動物は投与 16-18 時間前から投与 3-4 時間後まで絶食させた。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 日及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

投与経路	経 口	
性 別	雄	雌
投与量 (mg/kg)	5000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 5000	> 5000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 全動物で体重増加が認められた。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

② ラットにおける急性経皮毒性試験

(資料No. 10)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成]	ピラゾルフルフロンエチル	0.070%
	鉱物質微粉等	99.93%

供試動物 : SD 系 (CD) ラット、6-8 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 237-278g 雌 176-206g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

投与方法 : ラット背部を処理 24 時間前に剪毛し 7×5cm の処理部位を設けた。蒸留水で湿らせた検体を処理部位に直接塗布し、ガーゼ包帯で覆い、非刺激性テープで閉鎖パッチとした。24 時間後被覆物を除去し、水でふき取り残余検体を除去した。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

性 別	経 皮	
	雄	雌
投与量 (mg/kg)	2000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 2000	> 2000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	2000	2000
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	2000	2000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 体重増加はわずかに抑制された。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

(3) ラットにおける急性吸入毒性試験

(資料No. 11)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成]	ピラゾルフルオロエチル	0.070%
	鉱物質微粉等	99.93%

供試動物 : SD 系ラット、7-8 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 194-295g 雌 160-202g

観察期間 : 14 日間観察 (暴露日を 0 日として起算)

試験方法 : LC₅₀ 値算出

暴露方法 : 粒剤をエアゾールにして噴射し、4 時間鼻部暴露を行った。対照として清浄空気を通気した。暴露量は最初に約 2mg/l とし、次に 4 時間以上維持可能な最高濃度である 4.12mg/l を選抜した。

設定濃度 (mg/l)	7.41	10.98
実際濃度 (mg/l)	2.21	4.12
粒子径分布* (%)	< 10 μm	90.7
	< 6	77.8
	< 3.5	60.8
	< 2	17.0
	< 0.9	2.3
	< 0.5	-
	< 0.25	-
空気力学的質量中位径 (μm)	3.5	3.2
呼吸可能な粒子 (< 3 μm) の割合 (%)	40	47
チャンバー容積 (l)	約 41.5	
チャンバー内通気量 (l/min)	17-20	
暴露条件	エアロゾル、4 時間、鼻部暴露	

*: カスケードインパクターにより 2 回測定した平均

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態の観察については、暴露中及び暴露後 2 時間は 30 分ごと、それ以降は毎日 1 回 14 日間観察した。

体重は暴露前、暴露 2、3、4、7、10 及び 14 日に測定した。

14 日間観察期間終了時全動物をと殺した後、肉眼的病理検査を実施し、気道について詳細に検査した。

さらに、全動物の肺重量を測定し、肺 : 体重比を算出した。

結果 :

投与経路	吸 入	
性 別	雄	雌
暴露濃度 (mg/l)	0、2.21、4.12	
LC ₅₀ 値 (mg/l)	> 4.12	> 4.12
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び終了時間	暴露中/24 時間	暴露中/24 時間
死亡例の認められなかった 最大暴露濃度 (mg/l)	4.12	4.12

死亡 ; 死亡は認められなかった。

症狀 ; 4.12mg/l群において暴露時間中に呼吸低下が、暴露後に立毛、行動抑制、うずくまり姿勢
が認められたが、暴露翌日以降に異常は認められなかった。

体重 ; 全動物で体重増加が認められた。肺 : 体重比では 4.12mg/l群雌にわずかな上昇が認められ
たが、その他は正常範囲内であった。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかった。

④ マウスにおける急性経口毒性試験

(資料No. 12)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 0.070%
鉱物質微粉等 99.93%

供試動物 : ICR 系(CD-1)マウス、5-7 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 25-28g 雌 20-23g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

試験方法 : LD₅₀ 値算出

投与方法 : 検体を蒸留水に懸濁させ単回強制経口投与した。投与容量は 10 ml/kg とした。動物は投与 3-4 時間前から投与 30 分後まで絶食した。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 日及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

性 別	経 口	
	雄	雌
投与量 (mg/kg)	5000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 5000	> 5000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 全動物で体重増加が認められた。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

⑤ ウサギを用いた皮膚刺激性試験

(資料No. 22)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	0.070%
	鉱物質微粉等	99.93%

供試動物 : ニュージーランド白色ウサギ、雌雄各 3 匹

観察期 : 72 時間観察

投与方法 : 各動物の背部皮膚を刈毛し、蒸留水で湿らせた検体 0.5g を 2.5×2.5cm のガーゼに塗布し、半閉塞性被覆物で覆った。暴露時間は 4 時間とし、残余検体は湿らせたティッシュで拭き取った。

試験項目 : 暴露終了後 1 時間、塗布後 24、48 及び 72 時間に適用部位の刺激性変化（紅斑、痂皮、浮腫）の有無を観察した。判定の基準は農水省ガイドラインに従った。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を下表に示す。

動物番号	項 目	最高	暴 露 後 時 間			
			1 時間	24 時間	48 時間	72 時間
1 (雄)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
2 (雌)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
3 (雄)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
4 (雌)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
5 (雄)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
6 (雌)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮 腫	4	0	0	0	0
合計	紅斑・痂皮		0	0	0	0
	浮 腫		0	0	0	0
平均	紅斑・痂皮		0	0	0	0
	浮 腫		0	0	0	0

刺激性変化は全動物で認められなかった。

以上の結果から、0.07%粒剤はウサギ皮膚に対して、刺激性はないものと判断した。

⑥ ウサギを用いた眼刺激性試験

(資料No. 21)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	0.070%
	鉱物質微粉等	99.93%

供試動物 : ニュージーランド白色ウサギ、雌雄各 3 匹

観察期間 : 3 日間観察

投与方法 : 検体 100mg を直接右眼の下眼瞼結膜囊内に点眼し、1-2 秒間眼瞼を閉じあわせた。
左眼は無処理対照眼とした。

観察項目 : 点眼 1、24、48 及び 72 時間に角膜、虹彩及び結膜の刺激性変化を観察した。判定の基準は農水省ガイドラインに従った。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を次ページの表に示す。

点眼 24 時間に角膜のくもりが 6 匹中 2 匹で認められた。虹彩炎は認められなかった。

点眼 48 時間後まで軽度から中程度の結膜の発赤と浮腫が認められた。点眼 24 時間まで軽度から中程度の結膜分泌物が認められた。点眼 72 時間までに全処置眼で正常に回復した。

以上の結果から、0.07%粒剤はウサギの眼粘膜に対して、刺激性を有すると判断した。

項目		最高評点	適用後時間			
			1時間	24時間	48時間	72時間
動物番号 7 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	1	0	0
		浮腫	4	1	0	0
		分泌物*	3	1	0	0
動物番号 8 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	1	2	1
		浮腫	4	1	1	0
		分泌物*	3	1	1	0
動物番号 9 (雄)	角膜	4	0	0*	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	2	2	1
		浮腫	4	2	2	1
		分泌物*	3	2	1	0
動物番号 10 (雌)	角膜	4	0	0*	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	2	2	1
		浮腫	4	1	2	1
		分泌物*	3	2	1	0
動物番号 11 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	1	0	0
		浮腫	4	1	0	0
		分泌物*	3	1	0	0
動物番号 12 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	1	0	0
		浮腫	4	1	0	0
		分泌物*	3	1	0	0
合計	角膜	0	0	0	0	0
	虹彩	0	0	0	0	0
	結膜	発赤	8	6	3	0
		浮腫	7	5	3	0
		分泌物*	8	3	0	0
平均	角膜	0	0	0	0	0
	虹彩	0	0	0	0	0
	結膜	発赤	1.3	1.0	0.5	0
		浮腫	1.2	0.8	0.5	0
		分泌物*	1.3	0.5	0	0

*:くもりあり

*:農水省ガイドライン記載なし

(7) モルモット用いた皮膚感作性試験

(資料No. 26)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 0.07%粒剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	0.070%
	鉱物質微粉等	99.93%

供試動物 : ハートレー白色モルモット、1年未満、体重 : 374-463g、

投与群 ; 雌 20 匹、陰性対照群 ; 雌 20 匹

観察期間 : 感作開始から惹起終了後 48 時間観察まで (23 日間)

試験操作 : [Maximization 法]

処理方法を次表に示す。

群	供試 動物数	処理		
		感 作		惹 起
		皮内投与	経皮投与	
投与群	20	①FCA* ②10%水溶液 ③FCA・10%水溶液等量混合液	25%水溶液	(1) 25%水溶液 (2) 蒸留水
陰性 対照群	20	①FCA* ②蒸留水 ③FCA・蒸留水等量混合液	蒸留水	(1) 25%水溶液 (2) 蒸留水

* FCA : フロイント完全アジュバント

感作皮内投与 ; 肩甲部を剃毛し、左右各々の区画に、感作皮内投与液①、②及び③を各々 0.1ml 投与した。

感作経皮投与 ; 感作皮内投与 6 日後に、投与部位を再度剃毛し、感作性を高めるために SLS10% 水溶液を投与部位に塗布し、軽度の炎症を引き起こさせた。24 時間後、感作経皮投与液を塗布したパッチ (2×4cm) を 48 時間閉塞貼付した。パッチ除去後 24 時間に刺激性を評価した。

惹起経皮投与 ; 感作経皮投与の 2 週間後、左腹側部を剪毛・剃毛し、21 日に惹起経皮投与液(1)-(2)を塗布したパッチ (2×2cm) を 24 時間閉塞貼付した。

投与量設定根拠 ; 以下の予備検討結果をもとに決定した。

感作投与濃度 : 皮内投与は蒸留水による 10%、5%、2% 及び 1%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、2%濃度以上では注射した部位にわずかな刺激性反応が記録された。1%濃度では刺激が認められなかった。結果から 10%濃度とした。

局所貼付は蒸留水による 25%、10%、5% 及び 2%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、刺激性は見られなかったため 25%濃度とした。

惹起経皮経皮貼付濃度 ; 蒸留水による 25% 及び 10%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、刺激性は見られなかったため、25%濃度とした。

観察項目 : 惹起経皮貼付除去後 24 及び 48 時間に適用部位の紅斑及び浮腫の有無などを肉眼的に観察し、採点した。

採点及び評価方法；各観察時に下記に示す基準に従い採点した。

皮膚反応の評価表 (Magnusson & Kligman の基準：1969、1970 年)

皮膚反応の程度	評価
肉眼的に変化なし	0
散在性又は斑状の紅斑	1
中等度びまん性の紅斑	2
強い紅斑と浮腫	3

結果 : 各観察時における感作性変化が認められた動物数を下表に示す。

群	処理			供試動物数	感作反応動物数								陽性動物数	感作率(%)		
	感作		惹起		皮膚反応評点											
	皮内投与	経皮投与	経皮投与		24 時間後				48 時間後							
投与群	①FCA* ②10%水溶液 ③FCA・10%水溶液等量混合液	25%水溶液	(1) 25%水溶液	20	0	1	2	3	0	1	2	3	0	0		
			(2) 蒸留水		20	0	0	0	20	0	0	0				
陰性对照群	①FCA* ②蒸留水 ③FCA・蒸留水等量混合液	蒸留水	(1) 25%水溶液	20	20	0	0	0	20	0	0	0	0	0		
			(2) 蒸留水		20	0	0	0	20	0	0	0				

* FCA : フロイント完全アジュバント

感作 24 時間後、投与群及び対照群共にわずかな反応が認められた。

誘発 24、48 時間後、投与群及び対照群共に皮膚反応は認められず、毒性症状も認められなかった。

以上の結果から、0.07%粒剤の皮膚感作性は陰性であると判断した。

(2) 5%水和剤

① ラットにおける急性経口毒性試験

(資料No. 13)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 5.0%
 鉱物質微粉、界面活性剤等 95.0%

供試動物 : SD 系 (CD) ラット、6-8 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 164-218g 雌 152-163g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

試験方法 : LD₅₀ 値算出

投与方法 : 検体を蒸留水に懸濁させ、単回強制経口投与した。投与容量は 10 ml/kg とした。動物は投与 16-18 時間前から投与 3-4 時間後まで絶食させた。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 日及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

性 別	経 口	
	雄	雌
投与量 (mg/kg)	5000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 5000	> 5000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 全動物で体重増加が認められた。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

② ラットにおける急性経皮毒性試験

(資料No. 14)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 5.0%
鉱物質微粉、界面活性剤等 95.0%

供試動物 : SD 系 (CD) ラット、6-8 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 251-275g 雌 181-206g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

投与方法 : ラット背部を処理 24 時間前に剪毛し 7×5cm の処理部位を設けた。蒸留水で湿らせた検体を処理部位に直接塗布し、ガーゼ包帯で覆い、非刺激性テープで閉鎖パッチとした。24 時間後被覆物を除去し、水でふき取り残余検体を除去した。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 日及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

投与経路	経 皮	
性 別	雄	雌
投与量 (mg/kg)	2000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 2000	> 2000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	2000	2000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 体重増加はわずかに抑制された。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

③ ラットにおける急性吸入毒性試験

(資料No. 15)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	5.0%
	鉱物質微粉、界面活性剤等	95.0%

供試動物 : SD 系ラット、7-8 適齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 196-280g 雌 166-195g

観察期間 : 14 日間観察 (暴露日を 0 日として起算)

試験方法 : LC₅₀ 値算出

暴露方法 : 水和剤をエアゾールにして噴射し、4 時間鼻部暴露を行った。対照として清浄空気を通気した。投与量は最初に約 2mg/l とし、次に 5mg/l になるよう設定したが実際濃度が 4.68mg/l と低値であったため、さらに 5.25mg/l で実施した。

設定濃度(mg/l)	7.1	22.9	24.0
実際濃度(mg/l)	2.71	4.68	5.25
粒子径分布 (%) *	<10 μm	89.2	93.2
	<6	59.7	67.9
	<3.5	33.7	38.8
	<2	7.2	8.9
	<0.9	0.7	0.7
	<0.5	-	0.5
	<0.25	-	-
空気力学的質量中位径(μm)	4.8	4.3	5.0
呼吸可能な粒子(<3 μm)の割合(%)	23	27	20
チャンバー容積(l)	約 41.5		
チャンバー内通気量(l/min)	10-30		
暴露条件	エアロゾル、4 時間、鼻部暴露		

*: カスケードインパクターにより 2 回測定した平均

観察・検査項目: 生死の確認及び一般状態の観察については、暴露中及び暴露後 2 時間は 30 分ごと、それ以降は毎日 1 回 14 日間観察した。体重は暴露前、暴露後 2、3、4、7、10 及び 14 日に測定した。14 日間観察期間終了時全動物をと殺した後、肉眼的病理検査を実施し、気道について詳細に検査した。さらに、全動物の肺重量を測定し、肺: 体重比を算出した。

結果 :

投与経路	吸 入	
性 別	雄	雌
暴露濃度 (mg/l)	0、2.71、4.68、5.25	
LC ₅₀ 値 (mg/l)	> 5.25	> 5.25
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び終了時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5.25	5.25
死亡例の認められなかつた 最大暴露濃度 (mg/l)	5.25	5.25

() 死亡 ; 死亡は認められなかつた。

() 症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

() 体重 ; 全動物で体重増加が認められた。肺 : 体重比は正常範囲内であった。

() 肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

④ マウスにおける急性経口毒性試験

(資料No. 16)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 5.0%
鉱物質微粉、界面活性剤等 95.0%

供試動物 : ICR 系(CD-1)マウス、5-7 週齢、1 群雌雄各 5 匹、体重 : 雄 26-30g 雌 21-26g

観察期間 : 14 日間観察 (投与日を 0 日として起算)

試験方法 : LD₅₀ 値算出

投与方法 : 検体を蒸留水に懸濁させ、単回強制経口投与した。投与容量は 10 ml/kg とした。動物は投与 3-4 時間前から投与 3 時間後まで絶食した。

観察・検査項目 : 生死の確認及び一般状態を投与日は頻繁に、それ以降は 1 日 1 回、14 日間観察した。体重は投与直前、投与 7 日及び 14 日に測定した。観察期間終了時に全動物について肉眼的病理検査を実施した。

結果 :

性 別	経 口	
	雄	雌
投与量 (mg/kg)	5000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg) (95%信頼限界)	> 5000	> 5000
死亡開始時間及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現時間及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
毒性徴候の認められなかつた 最高投与量(mg/kg)	5000	5000
死亡例の認められなかつた 最高投与量 (mg/kg)	5000	5000

死亡 ; 死亡は認められなかつた。

症状 ; 全動物で異常は認められなかつた。

体重 ; 全動物で体重増加が認められた。

肉眼的病理検査 ; 全動物で異常は認められなかつた。

⑤ ウサギを用いた皮膚刺激性試験

(資料No. 24)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	5.0%
	鉱物質微粉、界面活性剤等	95.0%

供試動物 : ニュージーランド白色ウサギ、雌雄各 3 匹

観察期間 : 72 時間観察

投与方法 : 各動物の背部皮膚を刈毛し、蒸留水で湿らせた検体 0.5g を 2.5×2.5cm のガーゼ塗布し、半閉塞性被覆物で覆った。暴露時間は 4 時間とし、残余検体は湿らせたティッシュで拭き取った。

試験項目 : 暴露終了後 1 時間及び塗布後 24、48 及び 72 時間に適用部位の刺激性変化（紅斑、痂皮、浮腫）の有無を観察した。判定の基準は農水省ガイドラインに従った。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を下表に示す。

動物番号	項目	最高	暴露後時間			
			1 時間	24 時間	48 時間	72 時間
1 (雄)	紅斑・痂皮	4	1	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
2 (雌)	紅斑・痂皮	4	1	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
3 (雄)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
4 (雌)	紅斑・痂皮	4	1	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
5 (雄)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
6 (雌)	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0
	浮腫	4	0	0	0	0
合計	紅斑・痂皮	3	0	0	0	0
	浮腫	0	0	0	0	0
平均	紅斑・痂皮	0.5	0	0	0	0
	浮腫	0	0	0	0	0

1 時間後 3 匹に極軽微な紅斑（評点 1）が認められたが、24 時間後には全匹が正常に回復した。

以上の結果から、5%水和剤はウサギ皮膚に対して刺激性がないとものと判断した。

（申請者注：申請者は暴露終了後 1 時間に極軽微な紅斑が認められたことから、刺激性があるとした。）

⑥ ウサギを用いた眼刺激性試験

(資料No. 23-1、2)

試験機関：

(GLP 対応)

報告書作成年：1988年

検体純度 : 5%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	5.0%
	鉱物質微粉、界面活性剤等	95.0%

供試動物 : ニュージーランド白色ウサギ、非洗眼群 雌雄各3匹、洗眼群 雄2匹、雌1匹

観察期間 : 3日間観察

投与方法 : 検体 100mg を直接右眼の下眼瞼結膜囊内に点眼し、1-2秒間眼瞼を閉じあわせた。
左眼は無処理対照眼とした。洗眼群については2-3分後に蒸留水で洗眼した。

観察項目 : 点眼後1、24、48及び72時間に角膜、虹彩及び結膜の刺激性変化を観察した。判定の基準は農水省ガイドラインに従った。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を次頁の表に示す。

角膜及び虹彩の刺激性変化は、洗眼群、非洗眼群ともに認められなかった。全動物において軽度から中等度の結膜発赤や浮腫が見られ、洗眼群では軽度の分泌物が24時間後のみに認められ、非洗眼群では72時間後も2匹にわずかな発赤が認められたが、洗眼群では全動物が正常に回復した。

以上の結果から、5%水和剤はウサギの眼粘膜に対して刺激性を有するが、洗眼により軽減すると判断した。

項目			最高評点	適用後時間			
				1時間	24時間	48時間	72時間
非洗眼群	動物番号 7 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	1	1	0
			浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0	0
	動物番号 8 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	2	1
			浮腫	4	1	0	0
		分泌物*	3	0	0	0	0
	動物番号 9 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	2	1
			浮腫	4	2	1	0
		分泌物*	3	0	0	0	0
	動物番号 10 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	2	1
			浮腫	4	2	2	1
		分泌物*	3	0	0	0	0
	動物番号 11 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	2	1
			浮腫	4	2	1	0
		分泌物*	3	0	0	0	0
	動物番号 12 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
		虹彩	2	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	2	1
			浮腫	4	2	1	0
		分泌物*	3	0	0	0	0
	合計	角膜	0	0	0	0	0
		虹彩	0	0	0	0	0
		結膜	発赤	11	11	6	2
			浮腫	9	5	1	0
		分泌物*	0	0	0	0	0
	平均	角膜	0	0	0	0	0
		虹彩	0	0	0	0	0
		結膜	発赤	1.8	1.8	1.0	0
			浮腫	1.5	0.8	0.2	0
		分泌物*	0	0	0	0	0
洗眼 (3匹平均)	角膜	4	0	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0.67	1.67	0.67	0
		浮腫	4	0	0.67	0	0
	分泌物*	3	0	0.67	0	0	0

*: 農水省ガイドライン記載なし

⑦ ウサギを用いた眼刺激性試験

(資料No. 23-3)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1989 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	5.0%
	鉱物質微粉、界面活性剤等	95.0%

供試動物 : ニュージーランド白色ウサギ、雌雄各 3 匹

観察期間 : 3 日間観察

投与方法 : 蒸留水で検体を希釀 (NC-311 活性成分 100ppm を含む) した液 0.1ml を直接右眼の下眼瞼結膜囊内に点眼し、1—2 秒間眼瞼を閉じあわせた。左眼は無処理対照眼とした。

○ ○ 重度の刺激性がないことを確かめるために、まず、1 匹の動物を処置し、1 時間後に観察した。刺激性変化がないことを確かめた後に残りの 5 匹の動物に処置を行った。

観察項目 : 点眼後 1、24、48 及び 72 時間に角膜、虹彩及び結膜の刺激性変化を観察した。判定の基準は農水省ガイドラインに従った。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を次表に示す。

角膜、虹彩及び結膜にいずれも刺激性変化は認められなかった。

以上の結果から、5%水和剤を使用時濃度に希釈した場合、ウサギの眼粘膜に対して刺激性はないものと判断した。

項目		最高評点	適用後時間			
			1時間	24時間	48時間	72時間
動物番号 1 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
動物番号 2 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
動物番号 3 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
動物番号 4 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
動物番号 5 (雄)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
動物番号 6 (雌)	角膜	4	0	0	0	0
	虹彩	2	0	0	0	0
	結膜	発赤	3	0	0	0
		浮腫	4	0	0	0
		分泌物*	3	0	0	0
合計	角膜	0	0	0	0	0
	虹彩	0	0	0	0	0
	結膜	発赤	0	0	0	0
		浮腫	0	0	0	0
		分泌物*	0	0	0	0
平均	角膜	0	0	0	0	0
	虹彩	0	0	0	0	0
	結膜	発赤	0	0	0	0
		浮腫	0	0	0	0
		分泌物*	0	0	0	0

* : 農水省がトライ記載なし

(8) モルモット用いた皮膚感作性試験

(資料No. 27)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 1988 年

検体純度 : 5%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	5.0%
	鉱物質微粉、界面活性剤等	95.0%

供試動物 : ハートレー白色モルモット、1年未満、体重 : 424-521g、
投与群 ; 雌 20 匹、陰性対照群 ; 雌 20 匹

観察期間 : 24 日間観察

試験操作 : [Maximization 法]

処理方法を次表に示す。

群	供試 動物数	処理		
		感 作		惹 起
		皮内投与	経皮投与	
投与群	20	①FCA* ②10%水溶液 ③FCA・10%水溶液等量混合液	25%水溶液	(1) 25%水溶液 (2) 蒸留水
陰性 対照群	20	①FCA* ②蒸留水 ③FCA・蒸留水等量混合液	蒸留水	(1) 25%水溶液 (2) 蒸留水

* FCA : フロイント完全アジュバント

感作皮内投与 : 肩甲部を剃毛し、左右各々の区画に、感作皮内投与液①、②及び③を各々 0.1ml 投与した。

感作経皮投与 : 感作皮内投与 6 日後に、投与部位を再度剃毛し、感作性を高めるために SLS10% 水溶液を投与部位に塗布し、軽度の炎症を引き起こさせた。24 時間後、感作経皮投与液を塗布したパッチ (2×4cm) を 48 時間閉塞貼付した。パッチ除去後 24 時間に刺激性を評価した。

惹起経皮投与 : 感作経皮投与の 2 週間後、左腹側部を剪毛・剃毛し、21 日に惹起経皮投与液(1)-(2) を塗布したパッチ (2.0×2.0cm) を 24 時間閉塞貼付した。

投与量設定根拠 ; 以下の予備検討結果をもとに決定した。

感作投与濃度 : 皮内投与は蒸留水による 10%、5%、2% 及び 1%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、10%濃度では軽度-中等度、5% 及び 2%濃度では軽度の刺激性反応が認められ、1%濃度では刺激が認められなかったため、10%濃度とした。局所貼付は蒸留水による 25%、10%、5% 及び 2%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、刺激性は見られなかったため 25%濃度とした。

惹起経皮貼付濃度 : 蒸留水による 25% 及び 10%w/v 検体濃度希釈溶液を用いた試験を行った結果、刺激性は見られなかったため、25%濃度とした。

観察項目 : 惹起経皮貼付除去後 24 及び 48 時間に適用部位の紅斑及び浮腫の有無などを肉眼的に観察し、採点した。

採点及び評価方法；各観察時に下記に示す基準に従い採点した。

皮膚反応の評価表 (Magnusson & Kligman の基準：1969、1970 年)

皮膚反応の程度	評価
肉眼的に変化なし	0
散在性又は斑状の紅斑	1
中等度びまん性の紅斑	2
強い紅斑と浮腫	3

結果

：各観察時における感作性変化が認められた動物数を下表に示す。

群	処理			供試動物数	感作反応動物数								陽性動物数	感作率(%)		
	感作		惹起		皮膚反応評点											
	皮内投与	経皮投与	経皮投与		24 時間後				48 時間後							
投与群	①FCA* ②10%水溶液 ③FCA・10%水溶液等量混合液	25%水溶液	(1) 25%水溶液	20	20	0	0	0	20	0	0	0	0	0		
			(2) 蒸留水		20	0	0	0	20	0	0	0	0	0		
陰性対照群	①FCA* ②蒸留水 ③FCA・蒸留水等量混合液	蒸留水	(1) 25%水溶液	20	20	0	0	0	20	0	0	0	0	0		
			(2) 蒸留水		20	0	0	0	20	0	0	0	0	0		

* FCA : フロイント完全アジュバント

感作 24 時間後、投与群及び対照群共にわずかな反応が認められた。

誘発 24、48 時間後、投与群及び対照群共に皮膚反応は認められず、毒性症状もなかった。

以上の結果から、5%水和剤の皮膚感作性は陰性であると判断した。

(3) 70%顆粒水和剤

① ラットにおける急性経口毒性試験

(資料No. 50)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 2002 年

検体純度 : 70%水和剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 70.0%
界面活性剤等 30.0%

供試動物 : SD 系ラット [Hsd:Sprague-Dawley (CD)]、5~7 週齢、1 群雌雄各 3 匹

体重 : 雄 ; 121~133g 雌 ; 103~114g

観察期間 : 14 日間 (投与日を第 1 日と起算)

試験方法 : 毒性等級法

投与方法 : 検体を灌注用水に懸濁し単回強制経口投与した。投与容量は 10mL/kg とした。
動物は投与前に一夜絶食した。

観察項目 : 症状及び生死を 14 日間観察した。体重は第 1 日 (投与前)、8 及び 15 日に測定した。
試験終了時に全生存動物について肉眼的病理検査を行った。

結果 :

投与方法	経 口	
性別	雄	雌
投与量 (mg/kg)	2000	
LD ₅₀ 値 (mg/kg)	>2000	>2000
死亡開始及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現及び消失時間	1 日 / 2 日	1 日 / 2 日
死亡例の認められなかった 最高投与量 (mg/kg)	2000	2000

症状 ; 第 1 日に雄全匹及び雌 2 匹で立毛、雄 1 匹で流涎が認められた。

体重 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

肉眼的病理検査 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

② ラットにおける急性経皮毒性試験

(資料No. 51)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 2002 年

検体純度 : 70%水和剤

[組成] ピラゾスルフロンエチル 70.0%
界面活性剤等 30.0%

供試動物 : SD 系ラット [Hsd:Sprague-Dawley (CD)]、8~11 週齢、1 群雌雄各 5 匹

体重 : 雄 ; 233~243g 雌 ; 215~237g

観察期間 : 14 日間 (投与日を第 1 日と起算)

投与方法 : 検体を最高実用濃度である 1000mg/mL に灌注用水で調製し、2.0mL/kg 体重の容量で投与した。検体は投与前日に刈毛した背部皮膚 (約 5×5cm) に均一に塗布し、24 時間閉塞貼付した。

観察項目 : 症状、皮膚反応及び生死を 14 日間観察した。体重は第 1 日 (投与前)、8 及び 15 日に測定した。試験終了時に全生存動物について肉眼的病理検査を行った。

結果 :

投与方法	経 皮	
	雄	雌
性別		
投与量 (mg/kg)		2000
LD ₅₀ 値 (mg/kg)	>2000	>2000
死亡開始及び終了時間	死亡例なし	死亡例なし
症状発現及び消失時間	症状発現例なし	症状発現例なし
死亡例の認められなかった 最高投与量 (mg/kg)	2000	2000

症状 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

皮膚反応 ; 非常に軽度の皮膚刺激性 (評点 1 の浮腫を伴う又は伴わない紅斑) が検体除去後 8 匹に認められたが、第 8 日までに完全に消失した。

体重 ; 第 8 及び 15 日に雌各 2 匹で体重増加量の低値が認められた。

肉眼的病理検査 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

③ ウサギを用いた皮膚刺激性試験

(資料No. 52)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 2002 年

検体純度 : 70%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	70.0%
	界面活性剤等	30.0%

供試動物 : ニュージーランド白色種ウサギ、投与時 13 週齢、雄 3 匹、体重 : 2.7~2.9kg

観察期間 : 7 日間 (適用日を第 1 日と起算)

投与方法 : 検体 0.5g を 2.5×2.5cm の浸透性ガーゼパッドに載せた後、刈毛した背部皮膚に 4 時間閉塞貼付した。貼付終了後に浸透性ガーゼパッドを除去し、皮膚に残った検体を洗浄した。なお、検体の刺激性の可能性を明らかにするため、最初に 1 匹のみに適用した。この動物には検体を 3 部位に適用し、処置部位毎に貼付時間を変えた。それぞれ適用後 3 分、1 及び 4 時間貼付した。その結果、適用後 4 時間でも刺激性は認められなかったため、残り 2 匹は 4 時間閉塞貼付を行った。

観察項目 : 浸透性ガーゼパッド除去後 1、24、48 及び 72 時間、4 から 7 日までは毎日、投与部位の刺激性変化を観察し、EEC 試験方法及び OECD ガイドラインの基準に従って採点した。また、一般状態も観察した。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を下表に示す。なお、表中の適用後時間毎の合計、平均値及び皮膚一次刺激性指数 (Primary Irritation Index、PII) は申請者が Draize 法に従って算出し、刺激性強度を分類した。

動物番号	項目	最高評点	適用後時間							
			時間				日			
			1	24	48	72	4	5	6	7
3751	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0	0	—	—	—
	浮腫	4	0	0	0	0	0	—	—	—
3752	紅斑・痂皮	4	2	2	1	1	1	1	1	0
	浮腫	4	1	2	1	1	1	0	0	0
3753	紅斑・痂皮	4	0	0	0	0	0	—	—	—
	浮腫	4	0	0	0	0	0	—	—	—
合計	紅斑・痂皮		2	2	1	1	1	1	1	0
	浮腫		1	2	1	1	1	0	0	0
平均	紅斑・痂皮	0.7	0.7	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0
	浮腫	0.3	0.7	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0
PII : 0.92										

刺激性変化 ; 浸透性ガーゼパッド除去後 1 及び 24 時間に評点 2 の紅斑が、評点 1 又は 2 の浮腫が 1 匹に認められた。これらの刺激性変化は浸透性ガーゼパッド除去後 7 日までに全て消失した。

刺激性強度 ; 軽度刺激物

一般状態 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

本資料に記載された情報に係る権利及び内容の責任は日産化学工業株式会社にある。

以上の結果から、検体はウサギの皮膚に対して軽度の刺激性を有すると判断した。

申請者注：原報告書では刺激性の判定は EU 理事会指令に従って行われており、リスク警句 R38 「皮膚を刺激する」を表示する必要はないと結論されている。

④ ウサギを用いた眼刺激性試験

(資料No. 53)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 2002 年

検体純度 : 70%水和剤

〔組成〕	ピラゾスルフロンエチル	70.0%
	界面活性剤等	30.0%

供試動物 : ニュージーランド白色種ウサギ、2 週齢、非洗眼群 雄 2 匹 雌 1 匹、
洗眼群 雄 1 匹、体重 : 2.6~3.1kg

観察期間 : 7 日間

投与方法 : 検体 0.1mL (平均重量 62mg) を片眼の結膜囊内に適用した。洗眼群は、適用後 30 秒に蒸留水で洗眼した。一方の片眼は無処理対照眼とした。なお、検体の強度刺激性の可能性を明らかにするため、最初に洗眼群 1 匹のみに適用した。次に検体の強度刺激性の可能性を再確認するため非洗眼群 1 匹に適用した。その結果、強度刺激性が認められなかったため、非洗眼群の残り 2 匹に適用した。

観察項目 : 適用後 1、24、48 及び 72 時間、4 及び 7 日に刺激性変化を観察し、EEC 試験方法及び OECD ガイドラインの基準に従って採点した。また、一般状態も観察した。

結果 : 観察した刺激性変化の採点を次頁の表に示す。なお、表中の適用後時間毎の合計及び平均値は申請者が Draize 法に従って算出し、Kay & Calandra の方法に従って刺激性強度を分類した。

刺激性変化 ; 非洗眼群は、適用後 1 時間から結膜に刺激性変化が認められ、適用後 1 時間での刺激性変化が最も強かった。適用後 24 時間以降刺激性変化は減弱傾向を示し、適用後 24 時間に結膜の浮腫、適用後 7 日に結膜の発赤が消失した。

洗眼群も非洗眼群と同様の刺激性変化及び経過を示したが、その程度は非洗眼群に比し軽度であった。適用後 72 時間で全ての刺激性変化が消失した。

刺激性強度 ; 非洗眼群 軽度刺激物、洗眼群 軽度刺激物、洗眼効果あり。

一般状態 ; 検体投与に関連した影響は認められなかった。

以上の結果から、検体はウサギの眼に対して軽度の刺激性を有すると判断した。また、洗眼による刺激性の軽減が認められた。

申請者注 : 原報告書では刺激性の判定は EU 理事会指令に従って行われており、リスク警句 R36 「眼を刺激する」を表示する必要ないと結論されている。

項目			最高評点	適用後時間					
				時間			日		
1	24	48	72	4	7				
非洗眼群	動物番号 3778	角膜	程度	4	0	0	0	0	0
		混濁	面積	4	0	0	0	0	0
		虹彩		2	0	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	1	1	1	0
			浮腫	4	0	0	0	0	0
	動物番号 3779	角膜	程度	4	0	0	0	0	—
		混濁	面積	4	0	0	0	0	—
		虹彩		2	0	0	0	0	—
		結膜	発赤	3	2	1	1	0	—
			浮腫	4	1	0	0	0	—
洗眼群	動物番号 3780	角膜	程度	4	0	0	0	0	0
		混濁	面積	4	0	0	0	0	0
		虹彩		2	0	0	0	0	0
		結膜	発赤	3	2	1	1	1	0
			浮腫	4	1	0	0	0	0
		合計		110*	16	6	6	4	4
		平均			5.3	2.0	2.0	1.3	1.3
		0							
動物番号 3651	角膜	程度	4	0	0	0	0	—	—
	混濁	面積	4	0	0	0	0	—	—
	虹彩		2	0	0	0	0	—	—
	結膜	発赤	3	2	2	1	0	—	—
		浮腫	4	0	0	0	0	—	—
	合計		110*	4	4	2	0	—	—

* : Draize 法による個体別最高評価点

⑤ モルモットを用いた皮膚感作性試験

(資料No. 54)

試験機関 :

(GLP 対応)

報告書作成年 : 2002 年

検体純度 : 70%水和剤

[組成]	ピラゾスルフロンエチル	70.0%
	界面活性剤等	30.0%

供試動物 : Dunkin Hartley 系白色モルモット、5~7 週齢、体重 : 316~425g

検体感作群 雌 20 匹、検体非感作群 雌 10 匹

観察期間 : 感作開始日から惹起終了後 48 時間までの 30 日間

試験操作 : Buehler 法

投与量設定根拠 ; 予備試験の結果をもとに感作及び惹起時の検体処理濃度を決定した。25、50、75 及び 100% 検体を 0.5mL、6 時間閉塞貼付した。その結果、全濃度で刺激性反応が認められなかった。従って、本試験での感作及び惹起濃度は最大無刺激濃度である 100% を設定した。

処理物質 ; 感作及び惹起物質を下表に示す。

群	感作	惹起
検体感作群	100%検体	100%検体
検体非感作群	灌注用水	100%検体

処理方法 ; 感作は、刈毛・剃毛した動物の左肩部に、処理物質の 0.5mL を 2×2cm のパッチに塗布し 6 時間閉塞貼付した。同様の処理を 7 日間隔で合計 3 回行った。惹起は、最終感作後 14 日目に、5×5cm の広さに刈毛・剃毛した動物の右脇腹部に、処理物質の 0.5mL を 2×2cm のパッチに塗布し 6 時間閉塞貼付した。

観察項目 : 以下に示した項目について観察及び測定を行った。

一般状態 ; 感作開始日 (0 日) から惹起後の皮膚の観察終了日 (30 日後) まで毎日、動物の一般状態を観察した。

体重測定 ; 第 1 日 (感作開始日) 及び観察終了後に全動物の体重を測定した。

皮膚反応 ; 皮膚反応の観察は惹起貼付除去後 24 及び 48 時間にを行い、次に示す基準に従って評点した。

皮膚反応の評価表

皮膚反応の程度	評点
<u>紅斑及び痂皮の形成</u>	
紅斑なし	0
非常に軽度の紅斑 (かろうじて識別できる)	1
はっきりした紅斑	2
中等度ないし高度紅斑	3
高度紅斑 (真赤) からわずかな痂皮の形成 (深部損傷) まで	4
<u>浮腫の形成</u>	
浮腫なし	0
非常に軽度の浮腫 (かろうじて識別できる)	1
軽度浮腫 (はっきりした膨隆による明確な縁が識別できる)	2
中等度浮腫 (約 1mm の膨隆)	3
高度浮腫 (1mm 以上の膨隆と暴露範囲を超えた広がり)	4

評価 ; 感作群の皮膚反応が非感作群で認められた最大反応より明らかに顕著及び又は持続した場合に陽性と考えた。得られた陽性率(%)が少なくとも15%を示す場合、EU理事会指令に従ったリスク警句R43「皮膚接触により感作性を引き起こすおそれがある」を表示する。

結果：各観察時間における結果を下表に示す。

群		供試動物数	感作反応動物数									陽性率			
			24時間後				48時間後								
			皮膚反応評点					皮膚反応評点							
			0	1	2	3	計	0	1	2	3	計	24時間	48時間	
検体	100%検体	100%検体	20	20	0	0	0	0/20	20	0	0	0	0/20	0	0
	溶媒*	100%検体	10	10	0	0	0	0/10	10	0	0	0	0/10	0	0
陽性対照	HCA	HCA	10	0	9	1	0	10/10	2	7	1	10	8/10	100	80
	溶媒	HCA	10	10	0	0	0	0/10	10	0	0	0	0/10	0	0

* : 滴注用水

検体感作群及び検体非感作群で皮膚反応は認められなかった。

なお、直近に実施したモルモットの陽性対照物質(HCA: Hexyl Cinnamic Aldehyde)に対する感受性の確認試験(2001年12月27日～2002年01月28日)では、陽性率は100%であった。

一般状態では検体投与に関連した影響は認められなかった。

体重では検体投与に関連した影響は認められなかった。

以上の結果から、本試験条件下において検体の皮膚感作性は陰性と判断した。

4. 参考

(1) 急性毒性

①

(資料No. 2)

本資料に記載された情報に係る権利及び内容の責任は日産化学工業株式会社にある。

②

(資料No. 3)

本資料に記載された情報に係る権利及び内容の責任は日産化学工業株式会社にある。

(

、

本資料に記載された情報に係る権利及び内容の責任は日産化学工業株式会社にある。

③

(資料No. 7)

本資料に記載された情報に係る権利及び内容の責任は日産化学工業株式会社にある。

④

(資料No. 8)

IX. 動物、植物及び土壤等における代謝分解

<代謝分解試験一覧表 (1)>

資料No.	試験の種類	供試材料	供試化合物、処理量、方法	試験結果の概要	試験機関	記載頁																																																																											
M-1 GLP	動物代謝に関する試験 (単回及び反復投与)	SD系 雌雄ラット	標識 ビ'ラ'リ'スルフロンエチル 30 及び 1000mg/kg 単回経口投与 30mg/kg 15 回反復 (非標識体 14 回+標識体 1 回) 経口投与	<p>1) 排泄</p> <ul style="list-style-type: none"> ・尿糞中排泄は 48h までにはほぼ終了 ・尿糞中排泄率 (%、 0-168h) : <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="2">単回低用量</th> <th colspan="2">反復低用量</th> <th colspan="2">単回高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>尿</td> <td>57</td> <td>62</td> <td>58</td> <td>57</td> <td>52</td> <td>56</td> </tr> <tr> <td>糞</td> <td>37</td> <td>34</td> <td>37</td> <td>36</td> <td>46</td> <td>39</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>93</td> <td>96</td> <td>95</td> <td>93</td> <td>98</td> <td>95</td> </tr> </tbody> </table> <p>2) 組織中濃度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組織残留性なし (168h 後の総残留率 : 1%以下) <p>3) 血中濃度推移</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">パラメーター</th> <th colspan="2">単回低用量</th> <th colspan="2">反復低用量</th> <th colspan="2">単回高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Cmax (μg/g)</td> <td>84</td> <td>91</td> <td>92</td> <td>97</td> <td>715</td> <td>637</td> </tr> <tr> <td>Tmax (h)</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>5</td> <td>13</td> </tr> <tr> <td>AUC (mg·h/g)</td> <td>1.6</td> <td>2.1</td> <td>1.7</td> <td>1.6</td> <td>43</td> <td>48</td> </tr> <tr> <td>T_{1/2} (h)</td> <td>6</td> <td>7</td> <td>6</td> <td>5</td> <td>24</td> <td>16</td> </tr> </tbody> </table>		単回低用量		反復低用量		単回高用量		雄	雌	雄	雌	雄	雌	尿	57	62	58	57	52	56	糞	37	34	37	36	46	39	合計	93	96	95	93	98	95	パラメーター	単回低用量		反復低用量		単回高用量		雄	雌	雄	雌	雄	雌	Cmax (μg/g)	84	91	92	97	715	637	Tmax (h)	2	3	1	1	5	13	AUC (mg·h/g)	1.6	2.1	1.7	1.6	43	48	T _{1/2} (h)	6	7	6	5	24	16	1988年	IX-7
	単回低用量		反復低用量			単回高用量																																																																											
	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																											
尿	57	62	58	57	52	56																																																																											
糞	37	34	37	36	46	39																																																																											
合計	93	96	95	93	98	95																																																																											
パラメーター	単回低用量		反復低用量		単回高用量																																																																												
	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																											
Cmax (μg/g)	84	91	92	97	715	637																																																																											
Tmax (h)	2	3	1	1	5	13																																																																											
AUC (mg·h/g)	1.6	2.1	1.7	1.6	43	48																																																																											
T _{1/2} (h)	6	7	6	5	24	16																																																																											
M-2 GLP	動物代謝に関する試験 (単回及び反復投与)	SD系 雌雄ラット	標識 ビ'ラ'リ'スルフロンエチル 30 及び 1000mg/kg 単回経口投与 30mg/kg 15 回反復 (非標識体 14 回+標識体 1 回) 経口投与	<p>1) 排泄</p> <ul style="list-style-type: none"> ・尿糞中排泄は 48h までにはほぼ終了 ・尿糞中排泄率 (%、 0-168h) : <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="2">単回低用量</th> <th colspan="2">反復低用量</th> <th colspan="2">単回高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>尿</td> <td>52</td> <td>56</td> <td>60</td> <td>61</td> <td>56</td> <td>51</td> </tr> <tr> <td>糞</td> <td>39</td> <td>35</td> <td>38</td> <td>38</td> <td>40</td> <td>35</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>92</td> <td>91</td> <td>98</td> <td>99</td> <td>96</td> <td>86</td> </tr> </tbody> </table> <p>2) 組織中濃度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組織残留性なし (168h 後の総残留率 : 1%未満) <p>3) 血中濃度推移</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">パラメーター</th> <th colspan="2">単回低用量</th> <th colspan="2">反復低用量</th> <th colspan="2">単回高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Cmax (μg/g)</td> <td>84</td> <td>95</td> <td>96</td> <td>102</td> <td>498</td> <td>642</td> </tr> <tr> <td>Tmax (h)</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>AUC (mg·h/g)</td> <td>0.8</td> <td>1.0</td> <td>1.3</td> <td>1.2</td> <td>17</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td>T_{1/2} (h)</td> <td>7</td> <td>8</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>8</td> </tr> </tbody> </table>		単回低用量		反復低用量		単回高用量		雄	雌	雄	雌	雄	雌	尿	52	56	60	61	56	51	糞	39	35	38	38	40	35	合計	92	91	98	99	96	86	パラメーター	単回低用量		反復低用量		単回高用量		雄	雌	雄	雌	雄	雌	Cmax (μg/g)	84	95	96	102	498	642	Tmax (h)	1	2	1	1	6	11	AUC (mg·h/g)	0.8	1.0	1.3	1.2	17	22	T _{1/2} (h)	7	8	9	9	8	8	1988年	IX-16
	単回低用量		反復低用量			単回高用量																																																																											
	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																											
尿	52	56	60	61	56	51																																																																											
糞	39	35	38	38	40	35																																																																											
合計	92	91	98	99	96	86																																																																											
パラメーター	単回低用量		反復低用量		単回高用量																																																																												
	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																											
Cmax (μg/g)	84	95	96	102	498	642																																																																											
Tmax (h)	1	2	1	1	6	11																																																																											
AUC (mg·h/g)	0.8	1.0	1.3	1.2	17	22																																																																											
T _{1/2} (h)	7	8	9	9	8	8																																																																											
M-3 GLP	動物代謝に関する試験 (単回投与) 胆汁排泄	SD系 雌雄ラット	標識 あるいは 標識ビ'ラ'リ'スルフ ロンエチル 30 及び 1000mg/kg 単回経口投与	<p>胆汁排泄率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">低用量</th> <th colspan="4">高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>24</td> <td>25</td> <td>35</td> <td>43</td> <td>35</td> <td>16</td> <td>29</td> <td>20</td> </tr> </tbody> </table> <p>吸収率</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">低用量</th> <th colspan="4">高用量</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>89</td> <td>87</td> <td>86</td> <td>92</td> <td>70</td> <td>95</td> <td>63</td> <td>49</td> </tr> </tbody> </table>	低用量				高用量				雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	24	25	35	43	35	16	29	20	低用量				高用量				雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	89	87	86	92	70	95	63	49	1988年	IX-24																											
低用量				高用量																																																																													
雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																										
24	25	35	43	35	16	29	20																																																																										
低用量				高用量																																																																													
雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌																																																																										
89	87	86	92	70	95	63	49																																																																										

<代謝分解試験一覧表 (2) >

資料No.	試験の種類	供試材料	供試化合物、処理量、方法	試験結果の概要	試験機関 報告年	記載頁													
M-4	動物代謝に関する試験 (単回及び反復投与) <u>尿糞中代謝物</u>	SD系 雌雄ラット	標識 あるいは 標識ビラジ'スルフ ロンエチル 30 及び 1000mg/kg 単回経口投与 30mg/kg 15 回反 復 (非標識体 14回 +標識体 1回) 経口 投与	<u>尿糞中代謝物</u> 代謝物フロコイルは、用賀間、単回反復間でも 変わらず。性差なし。尿糞中主要代謝物は	1987 年	IX-26													
M-5	動物代謝に関する試験 (単回投与) <u>血漿/肝臓/腎臓/胆汁 中代謝物</u>	SD系 雌雄ラット	標識 あるいは 標識ビラジ'スルフ ロンエチル 30mg/kg 単回経口投与	<u>血漿/肝臓/腎臓/胆汁中代謝物</u> 血漿、肝臓、腎臓中の主要化合物は親化合物 (記号 A) 胆汁中主要代謝物は 性差なし。	1988 年	IX-32													
M-6	動物代謝に関する試験 (反復投与) 1) 血中濃度推移 2) 組織中濃度	SD系 雌雄ラット	標識 ビラジ'スルフロンエチル 30mg/kg 21 回反 復経口投与	1) 血中濃度推移 雌雄ラット共に血中濃度は投与期間中に徐々 に増加。投与終了後は緩やかに減少。最終 投与後 24 時間の濃度は 1 回投与後 24 時間 の濃度の 3-5 倍。最終投与後 120 時間の濃 度は最終投与後 24 時間の濃度の 1/2。 2) 組織中濃度 血漿中濃度が最も高く、反復投与による組 織への蓄積性、残留性なし。	1986 年	IX-36													
M-7	動物代謝に関する試験 (単回及び反復投与) 1) 尿糞中排泄 (単回) 2) 血中濃度推移 3) 組織中濃度	ICR系 雌雄マウス	標識 ビラジ'スルフロンエチル 30mg/kg 単回経口投与 30mg/kg 21 回反復 経口投与	1) 排泄 ・尿糞中排泄は 48h までにはほぼ終了 ・尿糞中排泄率 (% 0-120h) : <table border="1"> <tr> <th colspan="2">単回</th> </tr> <tr> <th>雄</th> <th>雌</th> </tr> <tr> <td>尿</td> <td>31</td> <td>18</td> </tr> <tr> <td>糞</td> <td>72</td> <td>69</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>104</td> <td>87</td> </tr> </table> 2) 血中濃度推移 ・単回投与: 投与 1-3 時間後に Cmax: 81-86 µg 親化合物換算/g) に達し、その後 48 時間ま でに速やかに減少。 ・反復投与: 投与期間中に徐々に増加。投与 終了後は緩やかに減少。 3) 組織中濃度 ・単回投与では血漿中濃度が最も高く、反復 投与による組織への蓄積性、残留性なし。	単回		雄	雌	尿	31	18	糞	72	69	合計	104	87	1986 年	IX-39
単回																			
雄	雌																		
尿	31	18																	
糞	72	69																	
合計	104	87																	

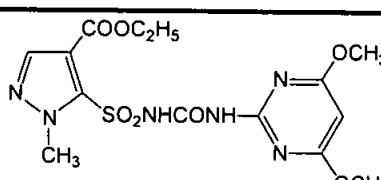
<代謝分解試験一覧表（3）>

資料No.	試験の種類	供試材料	供試化合物、処理量、方法	試験結果の概要	試験機関報告年	記載頁																																				
M-9	植物代謝に関する試験	水稻	標識あるいは標識ビ'ラ'スルフロンエチル 3葉期の苗に 2.1g ai/10a で田面水処理 処理 30 及び 60 日後の茎葉部及び 135 日後（収穫時）の玄米、粉殻及び 稻藁を採取	<p>処理 135 日後(収穫時)の総放射性残留物濃度 (TRR) 及び放射能分布 (%TRR) :</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>TRR</th> <th>4.3 ppb</th> <th>2.6 ppb</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>玄米</td> <td>抽出液</td> <td>42.1%TRR</td> <td>55.4%TRR</td> </tr> <tr> <td></td> <td>残渣</td> <td>57.9%TRR</td> <td>44.6%TRR</td> </tr> <tr> <td>粉殻</td> <td>TRR</td> <td>12.4 ppb</td> <td>11.2 ppb</td> </tr> <tr> <td></td> <td>抽出液</td> <td>40.5%TRR</td> <td>63.6%TRR</td> </tr> <tr> <td></td> <td>残渣</td> <td>59.5%TRR</td> <td>36.4%TRR</td> </tr> <tr> <td>稻藁</td> <td>TRR</td> <td>28.5 ppb</td> <td>58.9 ppb</td> </tr> <tr> <td></td> <td>抽出液</td> <td>39.6%TRR</td> <td>58.6%TRR</td> </tr> <tr> <td></td> <td>残渣</td> <td>60.4%TRR</td> <td>41.4%TRR</td> </tr> </tbody> </table> <p>収穫時の代謝物： 玄米； 粉殻； 稻藁； ビ'ラ'スルフロンエチル(記号 A) 0.7 ppb</p>		TRR	4.3 ppb	2.6 ppb	玄米	抽出液	42.1%TRR	55.4%TRR		残渣	57.9%TRR	44.6%TRR	粉殻	TRR	12.4 ppb	11.2 ppb		抽出液	40.5%TRR	63.6%TRR		残渣	59.5%TRR	36.4%TRR	稻藁	TRR	28.5 ppb	58.9 ppb		抽出液	39.6%TRR	58.6%TRR		残渣	60.4%TRR	41.4%TRR	1987 年	IX-46
	TRR	4.3 ppb	2.6 ppb																																							
玄米	抽出液	42.1%TRR	55.4%TRR																																							
	残渣	57.9%TRR	44.6%TRR																																							
粉殻	TRR	12.4 ppb	11.2 ppb																																							
	抽出液	40.5%TRR	63.6%TRR																																							
	残渣	59.5%TRR	36.4%TRR																																							
稻藁	TRR	28.5 ppb	58.9 ppb																																							
	抽出液	39.6%TRR	58.6%TRR																																							
	残渣	60.4%TRR	41.4%TRR																																							
M-8	植物代謝に関する試験	稻、ヒエ、ミズガヤツリ	標識あるいは標識ビ'ラ'スルフロンエチル 根部吸収移行性：0.084ppm 水耕液に浸漬 1, 3, 5, 7 日後 代謝分解：0.84 ppm 水耕液に 24 時間浸漬後未処理水耕液移植 0, 1, 3, 7 日後	<p>根部吸収移行性： 茎葉部への移行性は稻>ヒエ>ミズガヤツリの順</p> <p>代謝分解： 代謝速度は稻>ヒエ>ミズガヤツリの順 代謝速度にはへの変換が大きく関与しており、選択性発現の一因と考察</p>	1986 年	IX-54																																				
M-10 (参考)	植物代謝に関する試験	玄米	0.07%粒剤 3 kg/10a 分析法：	<p>添加回収親化合物、 を添加し、各トータル法で検出。全て 73%以上の回収率。</p> <p>試料分析 朽木及び愛知の農業試験場で調製された玄米は全て定量限界未満(<0.005ppm)。</p>	1988 年	IX-58																																				
M-11	土壤中動態に関する試験	壤土 軽埴土	標識あるいは標識ビ'ラ'スルフロンエチル 0.2 µg/g, 25°C 好気湛水条件 嫌気湛水条件 好気畑条件	<p>半減期は 3～15 日。 主要代謝分解物は、湛水条件では、畑条件では。</p>	1988 年	IX-60																																				
M-14	水中動態に関する試験 (加水分解動態試験)	滅菌緩衝液 (pH5, 7, 9) 非滅菌及び滅菌田面水 非滅菌及び滅菌河川水	標識あるいは標識ビ'ラ'スルフロンエチル 0.2 µg/mL, 25°C 暗所	<p>半減期は pH5 で 19.6 日、pH7 で 28.2 日、pH9 で 16.3 日、田面水・河川水で約 30 日。 主要分解物は pH5 及び pH7 で 田面水・河川水は pH7 と類似し、滅菌・非滅菌の差はない。</p>	1988 年	IX-69																																				
M-15	水中動態に関する試験 (水中光分解動態試験)	滅菌緩衝液 (pH7) 滅菌田面水	標識あるいは標識ビ'ラ'スルフロンエチル 0.2 µg/mL、太陽光照射	<p>半減期は緩衝液で照射区 32.6 日、暗所区 35.6 日、田面水で照射区 28.3 日、暗所区 38.3 日。光分解の影響が確認されたが、特定の光分解物は認められず。主要分解物は。</p>	1988 年	IX-75																																				

<代謝分解試験一覧表（4）>

資料No.	試験の種類	供試材料	供試化合物、処理量、方法	試験結果の概要	試験機関報告年	記載頁
M-12	土壤吸脱着試験	砂質埴土 (5) 砂埴土 (5) 軽埴土 (3) 壤土 (4)	標識 ビ'ラ'スルフロンエチル及 び 土壤/水=1/5、 25℃ ビ'ラ'スルフロンエチル: 5 濃度	有機炭素吸着係数： ビ'ラ'スルフロンエチル； 154.0～588.5 脱着率： ビ'ラ'スルフロンエチル； 5.1～28.3%	日産化学 1988年	IX-78

代謝分解物一覧表

記号	由来	略称	化学名	構造式
A	親化合物 ピラゾスルファン エチル	NC-311	ethyl 5-(4, 6-dimethoxypyrimidin-2-ylcarbamoylsulfamoyl)-1-methylpyrazole-4-carboxylate エチル=5-(4, 6-ジメトキシピリミジン-2-イルカルバモイルスルファモイル)-1-メチルピラゾール-4-カルボキシラート	

ピラゾスルフロンエチルの代謝・分解試験について

1. 標識化合物

代謝・分解試験に供試するため、
種の 標識化合物を合成した。

標識ピラゾスルフロンエチルと

標識ピラゾスルフロンエチルの 2

代謝試験は、基本的に両標識体を被験物質として使用した。

2. 標識位置設定理由

3. 標識化合物の名称

本抄録中では、 標識化合物の名称を以下のように表記した。

標識ピラゾスルフロンエチル	→	ピラゾスルフロンエチルあるいは	標識体
標識ピラゾスルフロンエチル	→	ピラゾスルフロンエチルあるいは	標識体

4. 比放射能の表示

本抄録中では、 標識化合物の比放射能は、 MBq/mg 単位にて表記した。

1. 動物代謝に関する試験

①ラット体内における代謝試験 (標識体経口投与による排泄、分布、血中濃度推移)

資料No. M-1

試験機関：

[GLP対応]

報告書作成年： 1988年

供試標識化合物：

構造式；

化学名； ethyl 5-(4,6-dimethoxypyrimidin-2-ylcarbamoylsulfamoyl)-1-methylpyrazole-4-carboxylate
比放射能；

放射化学的純度； %

非標識体純度； %

供試動物：SD系雌雄ラット (127-181 g, 6-11週令)

試験方法：

投与；供試化合物を1% Tween 80水溶液中に懸濁し、投与液を調製した。低用量は30 mg/kg、
高用量は1000 mg/kgとし、5 ml/kgの割合で経口投与した。

用量設定根拠；

試験設計；以下の表に試験設計をまとめた。

投与群	用量	回数・経路	動物数	検討項目	試料採取時間 (h)
A	低用量	単回経口	雌雄各6	排泄	尿: 6, 24, 48, 72, 96, 120, 144, 168 糞: 24, 48, 72, 96, 120, 144, 168 呼気: 24、屍体(屠殺): 168
			雌雄各20	組織分布	3, 24, 72, 168
			雌雄各5	血中濃度推移	投与前, 0.5, 1, 2, 3, 6, 9, 12, 24, 48, 72, 96, 120, 144, 168
B	低用量	非標識体14日間反復 経口及び標識体単回 経口(反復経口)	雌雄各6	排泄	投与群Aの排泄と同様
			雌雄各20	組織分布	投与群Aの組織分布と同様
			雌雄各5	血中濃度推移	投与群Aの血中濃度推移と同様
C	高用量	単回経口	雌雄各6	排泄	投与群Aの排泄と同様
			雌雄各20	組織分布	投与群Aの組織分布と同様
			雌雄各5	血中濃度推移	投与群Aの血中濃度推移と同様

試験項目：

排泄：被験物質を投与後、ラットをガラス製代謝ケージに収容した。動物毎に尿及び糞を冷却受器の中に採取した。呼気は2-エトキシエタノール：エタノールアミン（3:1, v/v）を入れた捕集容器中を通過させた。採取時間毎に餌かすも採取し、ケージは水あるいは水とメタノールで洗浄した。投与168時間後にエーテル麻酔により屠殺し、屍体を分析に供した。

組織分布：被験物質を投与後、ラットを網床のケージに収容した。エーテル麻酔により屠殺し、臓器/組織（骨、骨髓、脳、血液/血漿、脂肪、生殖腺、心臓、腎臓、肝臓、肺、筋肉、脾臓、子宮、屍体、副腎、胰臓、甲状腺、胃、腸管、消化管内容物、眼球及び脳下垂体）を採取した。

血中濃度推移：被験物質を投与後、ラットを網床のケージに収容した。血液をラットの側方静脈からヘパリン処理したヘマトクリット管に採取した。

放射能測定：

全ての生体試料は容量あるいは重量を測定した。

糞及び餌かすはメタノールで抽出し、抽出液は一部をLSCに、残渣は燃焼に供した。肝臓、消化管内容物及び屍体は4倍容量の水で均一磨碎し、一部を燃焼に供した。脂肪、生殖腺、心臓、腎臓、肺、筋肉、脾臓、胰臓、胃及び腸管ははさみで細断し、一部を燃焼に供した。液体試料はその一部をLSCに供した。その他の組織はそのまま燃焼に供した。

分析機器：

液体シンチレーションカウンター（LSC）：液体試料は、シンチレーターと混合して放射能を測定した。

試料燃焼装置：固体試料中の放射能は試料燃焼装置にて燃焼後、トラップした¹⁴CO₂をLSCで測定した。

結果：

排泄；各投与群における168時間までの尿糞中排泄率を表1及び図1に示した。

表1. 各投与群の168時間までの尿糞中排泄率及び屍体残存率（原報告書Table 9.1-9.32）

試料	時間(h)	A群 (30 mg/kg単回)		B群 (30 mg/kg反復)		C群 (1000 mg/kg単回)	
		雄	雌	雄	雌	雄	雌
尿	0-6	14.5	17.4	19.6	17.8	5.8	5.4
	6-24	29.5 (44.0)	31.9 (49.3)	31.9 (51.5)	32.6 (50.4)	26.0 (31.8)	27.8 (33.2)
	24-48	10.7 (54.7)	9.5 (58.8)	5.7 (57.2)	5.1 (55.5)	18.1 (49.9)	20.1 (53.3)
	48-72	1.2 (55.9)	2.0 (60.8)	0.6 (57.8)	0.8 (56.3)	1.6 (51.5)	2.1 (55.4)
	72-96	0.3 (56.2)	0.4 (61.2)	0.2 (58.0)	0.2 (56.5)	0.2 (51.7)	0.3 (55.7)
	96-120	0.1 (56.3)	0.2 (61.4)	0.1 (58.1)	0.1 (56.6)	0.1 (51.8)	0.1 (55.8)
	120-144	0.1 (56.4)	0.1 (61.5)	<0.1 (58.1)	0.1 (56.7)	<0.1 (51.8)	0.1 (55.9)
	144-168	<0.1 (56.4)	0.1 (61.6)	<0.1 (58.1)	0.1 (56.8)	<0.1 (51.8)	0.1 (56.0)
	尿合計	56.5	61.5	58.1	56.9	51.8	55.9
糞	0-24	19.5	17.0	22.4	17.2	17.8	15.1
	24-48	13.4 (32.9)	11.9 (28.9)	12.5 (34.9)	15.7 (32.9)	22.0 (39.8)	16.3 (31.4)
	48-72	2.2 (35.1)	4.4 (33.3)	1.2 (36.1)	1.4 (34.3)	5.3 (45.1)	6.6 (38.0)
	72-96	0.4 (35.5)	0.4 (33.7)	0.3 (36.4)	0.3 (34.6)	0.4 (45.5)	0.8 (38.8)
	96-120	1.0 (36.5)	0.7 (34.4)	0.2 (36.6)	0.4 (35.0)	0.1 (45.6)	0.2 (39.0)
	120-144	<0.1 (36.5)	<0.1 (34.4)	0.2 (36.8)	0.9 (35.9)	0.1 (45.7)	0.1 (39.1)
	144-168	<0.1 (36.5)	<0.1 (34.4)	<0.1 (36.8)	0.2 (36.1)	<0.1 (45.7)	<0.1 (39.1)
	糞合計	36.6	34.4	36.7	36.1	45.9	38.9
ケージ洗浄		7.7	6.9	5.7	8.6	4.3	7.4
呼気		ND	ND	ND	ND	ND	ND
餌かす		ND	ND	ND	ND	0.2	<0.1
屍体		0.3	0.4	0.4	0.6	0.7	0.6
合計		101.1	103.2	100.9	102.2	102.9	102.9

数値は投与放射能に対する比率(%)として示す。（ ）内は累積排泄率を示す。ND : <0.01

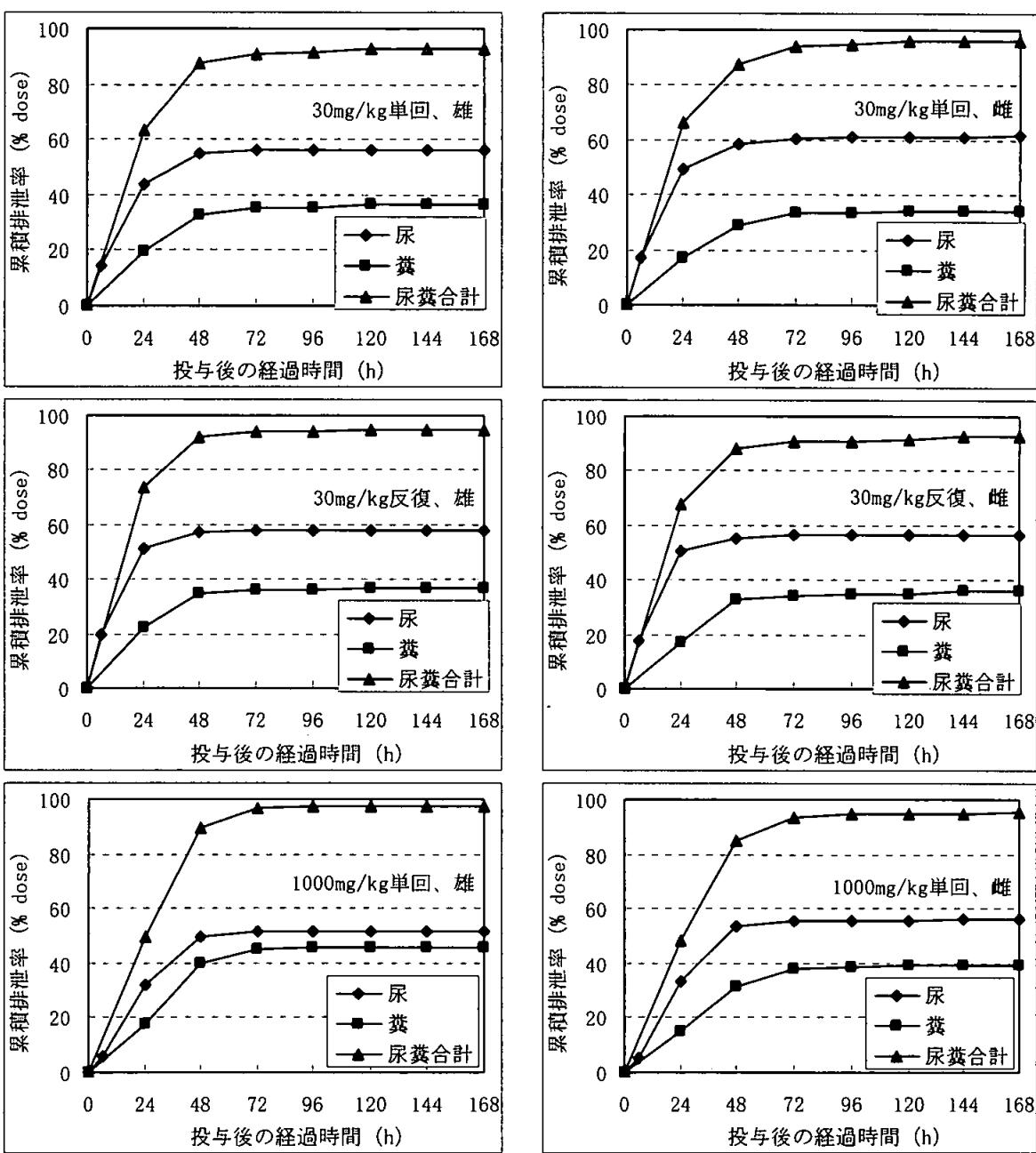


図 1. 各群の168時間までの尿糞中累積排泄率 (原報告書Figure 9. 105-9. 110)

168時間までに尿中に排泄された放射能は52-62%、糞中に排泄された放射能は34-46%であり、168時間での屍体中放射能は1%未満であった。全体の回収は101-103%であった。尿及び糞中放射能の大部分は72時間までに排泄された(90%以上)。用量間及び雌雄間に差は認められず、反復投与による影響も認められなかった。

組織分布；各投与群における各組織中濃度及び分布率を表2～7に示した。

表2. 雄ラットに30 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9. 65及び9. 67)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	26.6	0.01	1.7	ND	0.2	ND	1.9	<0.01
血液	66.6	-	7.3	-	1.7	-	1.2	-
骨髓	16.2	-	1.4	-	ND	-	0.2	-
骨	5.4	-	0.7	-	<0.1	-	0.3	-
脳	2.1	0.07	0.2	0.01	ND	ND	<0.1	<0.01
屍体	10.5	34.28	1.5	4.96	0.3	1.14	0.1	0.40
眼球	9.0	0.04	0.6	ND	0.1	ND	0.3	<0.01
脂肪	14.9	-	1.1	-	0.1	-	ND	-
消化管内容物	56.1	11.94	13.1	2.36	1.1	0.23	0.4	0.10
生殖腺	14.5	0.64	1.2	0.05	0.1	<0.01	0.1	0.01
心臓	28.1	0.41	2.2	0.03	0.4	0.01	0.3	0.01
腸管	37.8	7.52	4.6	0.78	0.5	0.09	0.2	0.03
腎臓	30.4	1.67	2.8	0.09	0.4	0.01	0.2	0.01
肺	32.7	0.57	2.7	0.05	0.4	0.01	0.3	<0.01
肝臓	42.0	5.40	4.5	0.91	0.1	0.02	0.1	0.02
血漿	126.7	-	11.0	-	0.9	-	0.2	-
脾臓	21.0	0.26	1.5	0.02	0.2	<0.01	0.1	<0.01
脳下垂体	28.8	ND	0.7	ND	ND	ND	51.8	0.01
筋肉	12.3	-	0.8	-	0.1	-	0.1	-
脾臓	20.3	0.20	1.2	0.01	0.3	<0.01	0.3	<0.01
胃	65.7	1.47	2.6	0.07	0.4	0.01	0.1	<0.01
甲状腺	124.2	0.01	7.0	ND	ND	ND	4.3	<0.01
総残留率		64.49		9.34		1.52		0.59

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表3. 雌ラットに30 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9. 66及び9. 68)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	31.9	0.04	4.6	0.01	0.4	<0.01	0.3	ND
血液	69.1	-	11.3	-	2.2	-	1.3	-
骨髓	18.1	-	3.4	-	3.2	-	0.3	-
骨	6.5	-	0.7	-	0.3	-	0.2	-
脳	2.3	0.08	0.3	0.01	<0.1	ND	<0.1	ND
屍体	10.5	31.80	2.1	6.65	0.5	1.54	0.3	0.81
眼球	9.5	0.05	2.6	0.01	0.1	<0.01	0.1	ND
脂肪	11.0	-	2.0	-	0.1	-	<0.1	-
消化管内容物	45.4	10.22	34.1	7.40	1.1	0.24	0.5	0.10
生殖腺	53.8	0.08	4.9	0.01	0.4	<0.01	0.2	ND
心臓	26.4	0.38	3.4	0.05	0.4	0.01	0.2	<0.01
腸管	34.5	5.40	8.8	1.38	0.5	0.08	0.2	0.03
腎臓	31.5	0.90	4.5	0.12	0.5	0.01	0.2	0.01
肺	34.5	1.05	4.6	0.08	0.6	0.01	0.3	0.01
肝臓	39.5	4.83	8.8	1.32	0.2	0.03	0.1	0.02
血漿	129.3	-	17.9	-	1.2	-	0.3	-
脾臓	18.5	0.20	2.5	0.04	0.3	<0.01	0.1	<0.01
脳下垂体	26.5	0.01	4.8	ND	ND	ND	ND	ND
筋肉	9.9	-	1.4	-	0.1	-	0.1	-
脾臓	13.0	0.13	2.0	0.02	0.5	<0.01	0.3	<0.01
胃	16.9	0.38	2.7	0.06	0.3	0.01	0.2	<0.01
甲状腺	100.3	0.02	7.4	ND	0.3	ND	0.2	ND
子宮	29.5	0.40	4.9	0.09	0.5	0.01	0.2	<0.01
総残留率		55.97		17.25		1.94		0.98

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表4. 雄ラットに30 mg/kg反復投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.85及び9.87)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	19.7	0.01	1.7	<0.01	0.1	ND	0.2	ND
血液	63.4	-	6.7	-	2.1	-	1.4	-
骨髓	15.8	-	1.7	-	0.3	-	ND	-
骨	11.4	-	0.5	-	0.2	-	ND	-
脳	2.4	0.05	0.2	<0.01	ND	ND	ND	ND
屍体	12.1	37.33	1.2	3.66	0.5	1.55	0.1	0.35
眼球	9.2	0.03	0.9	<0.01	0.1	<0.01	<0.1	ND
脂肪	4.8	-	0.4	-	<0.1	-	ND	-
消化管内容物	74.4	14.07	22.2	3.87	4.6	0.85	0.3	0.04
生殖腺	18.6	0.67	1.2	0.04	0.1	0.01	ND	ND
心臓	24.6	0.32	1.9	0.02	0.4	0.01	0.2	<0.01
腸管	31.3	3.91	6.7	0.99	1.3	0.19	0.1	0.01
腎臓	29.3	0.83	2.6	0.07	0.5	0.01	0.2	0.01
肺	28.9	0.46	2.6	0.04	0.6	0.01	0.3	<0.01
肝臓	48.5	5.88	4.3	0.69	0.2	0.03	ND	ND
血漿	139.5	-	10.9	-	0.9	-	0.3	-
脾臓	13.6	0.13	1.5	0.01	0.2	<0.01	0.1	<0.01
脳下垂体	20.7	ND	2.0	ND	ND	ND	ND	ND
筋肉	9.0	-	0.6	-	0.1	-	ND	-
脾臓	11.7	0.09	1.1	0.01	0.5	<0.01	0.3	<0.01
胃	17.1	0.43	0.9	0.02	1.0	0.02	0.1	<0.01
甲状腺	33.3	0.01	3.4	ND	ND	ND	ND	ND
総残留率		64.22		9.42		2.68		0.41

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表5. 雌ラットに30 mg/kg反復投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.86及び9.88)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	16.2	0.02	3.7	ND	0.3	ND	0.1	ND
血液	74.6	-	13.2	-	2.4	-	1.7	-
骨髓	13.2	-	3.7	-	ND	-	ND	-
骨	8.9	-	0.7	-	0.2	-	ND	-
脳	2.2	0.07	0.3	0.01	ND	ND	ND	ND
屍体	11.8	34.26	2.4	7.33	1.0	3.08	0.3	0.93
眼球	8.7	0.04	1.6	0.01	0.2	<0.01	0.1	ND
脂肪	7.4	-	1.3	-	0.1	-	ND	-
消化管内容物	65.3	11.69	32.5	8.37	2.7	0.45	0.5	0.09
生殖腺	37.1	0.06	4.6	0.01	0.7	<0.01	0.1	ND
心臓	27.9	0.38	4.1	0.06	0.6	0.01	0.2	<0.01
腸管	36.4	5.24	9.9	1.59	1.0	0.17	0.2	0.03
腎臓	28.0	0.69	5.0	0.13	0.6	0.02	0.3	0.01
肺	32.9	0.59	5.1	0.10	0.8	0.01	0.3	0.01
肝臓	49.5	5.92	9.6	1.49	0.2	0.03	ND	ND
血漿	138.3	-	21.5	-	1.1	-	0.3	-
脾臓	19.6	0.17	2.9	0.03	0.3	<0.01	0.1	<0.01
脳下垂体	37.0	ND	6.6	ND	ND	ND	0.3	ND
筋肉	7.1	-	1.3	-	0.1	-	ND	-
脾臓	11.5	0.09	2.3	0.02	0.5	<0.01	0.3	<0.01
胃	15.8	0.34	3.9	0.12	0.5	0.01	0.2	<0.01
甲状腺	28.6	0.01	10.7	ND	2.2	ND	ND	ND
子宮	36.5	0.24	6.9	0.06	0.6	0.01	0.2	<0.01
総残留率		59.81		19.33		3.79		1.07

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表6. 雄ラットに1000 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.45及び9.47)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	601	0.01	137	ND	3	ND	3	ND
血液	888	-	373	-	52	-	44	-
骨髓	580	-	144	-	3	-	2	-
骨	129	-	64	-	7	-	4	-
脳	195	0.13	34	0.02	<1	ND	1	ND
屍体	281	21.60	90	7.39	10	0.85	5	0.45
眼球	393	0.04	89	0.01	6	<0.01	3	ND
脂肪	198	-	68	-	1	-	1	-
消化管内容物	10327	31.07	1607	9.30	70	0.42	9	0.04
生殖腺	316	0.34	91	0.10	3	<0.01	1	<0.01
心臓	557	0.20	132	0.05	11	<0.01	7	<0.01
腸管	1380	5.23	426	1.48	13	0.04	3	0.01
腎臓	586	0.41	185	0.14	13	0.01	7	0.01
肺	627	0.24	126	0.05	14	0.01	8	<0.01
肝臓	631	1.72	151	0.76	10	0.04	2	0.01
血漿	1381	-	572	-	21	-	6	-
脾臓	403	0.11	98	0.03	7	<0.01	4	<0.01
脳下垂体	580	ND	101	ND	ND	ND	ND	ND
筋肉	302	-	55	-	4	-	3	-
脾臓	399	0.08	84	0.02	14	<0.01	9	<0.01
胃	3566	2.05	1539	1.02	11	0.01	5	<0.01
甲状腺	703	ND	123	ND	4	ND	ND	ND
総残留率		63.23		20.37		1.38		0.52

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表7. 雌ラットに1000 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.46及び9.48)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	413	0.01	127	ND	8	ND	12	ND
血液	885	-	386	-	76	-	45	-
骨髓	396	-	181	-	4	-	ND	-
骨	99	-	71	-	8	-	4	-
脳	167	0.16	27	0.03	1	<0.01	<1	ND
屍体	255	20.63	87	7.39	15	1.26	10	0.92
眼球	355	0.05	87	0.01	7	<0.01	5	<0.01
脂肪	251	-	61	-	4	-	3	-
消化管内容物	12281	32.45	1710	12.91	60	0.35	15	0.07
生殖腺	604	0.03	169	0.01	16	<0.01	4	ND
心臓	520	0.22	152	0.06	16	0.01	7	<0.01
腸管	1296	5.12	516	2.11	24	0.10	6	0.02
腎臓	589	0.44	208	0.17	15	0.01	7	0.01
肺	597	0.30	167	0.08	17	0.01	9	0.01
肝臓	610	1.83	179	0.84	10	0.04	ND	ND
血漿	1339	-	588	-	29	-	7	-
脾臓	482	0.15	119	0.04	8	<0.01	4	<0.01
脳下垂体	563	ND	159	ND	9	ND	1	ND
筋肉	276	-	64	-	6	-	3	-
脾臓	388	0.09	103	0.02	16	<0.01	9	<0.01
胃	3126	2.25	1000	0.68	10	0.01	6	<0.01
甲状腺	752	ND	161	ND	10	ND	6	ND
子宮	630	0.15	178	0.04	15	<0.01	7	<0.01
総残留率		63.88		24.39		1.79		1.03

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

投与 3~168 時間後における組織内放射能濃度は、各投与群ともに投与 3 時間後の組織が最高値を示した。その後経時的に減少し、168 時間後では概ね検出限界レベルであった。投与 3 時間後の低用量において最も濃度が高かったのは血漿であり、127~140 μg 親化合物換算/g であった。投与 3 時間後の高用量では消化管内容物の濃度が最も高く、10327~12281 μg 親化合物換算/g であった。胃及び腸管を除くと、高用量の血漿中濃度も高く、1339~1381 μg 親化合物換算/g であった。どの投与群においても血液中濃度は 24 時間後までは血漿中濃度よりも低かったが 72 時間以降は血漿中濃度よりも高くなつた。

分布率では全体的に屍体の比率が高く（3時間後：21~37%）、その消失パーセンテージは用量、雌雄、投与回数に関係なく類似しており、168時間後には全て1%未満となつた。また、消化管系以外で比率が高かった肝臓は、3時間後で2~6%を示し、168時間後では検出限界レベルまで減衰した。

血中濃度推移；各投与群における血中放射能濃度推移を表 8 及び図 2、3、4 に示した。

表 8. 各投与群の血中濃度推移（原報告書Table 9.33, 9.34, 9.37, 9.38, 9.41及び9.42）

採取時間 (h)	30 mg/kg 単回		30 mg/kg 反復		1000 mg/kg 単回	
	雄	雌	雄	雌	雄	雌
投与前	ND	ND	ND	ND	ND	ND
0.5	63.37	55.13	66.8	78.7	327.3	289.7
1	79.56	65.92	87.4	95.1	456.5	421.6
2	83.19	76.67	86.6	88.9	577.9	524.3
3	76.00	75.18	81.2	82.1	671.2	569.7
6	59.93	71.54	60.7	52.6	697.9	599.7
9	41.00	50.06	44.0	38.2	613.9	556.7
12	29.06	37.11	31.4	26.5	527.1	510.4
24	9.61	14.39	10.5	8.9	483.9	446.8
48	2.99	4.04	3.3	2.9	124.2	212.2
72	1.93	2.64	2.4	2.1	69.3	86.0
96	1.75	2.29	2.2	2.0	60.8	70.3
120	1.57	1.91	1.9	1.8	57.2	65.5
144	1.41	1.65	1.7	1.6	53.0	60.3
168	1.38	1.63	1.6	1.4	48.3	56.4

濃度 (μg 親化合物換算/g) は5匹の平均値として示した。

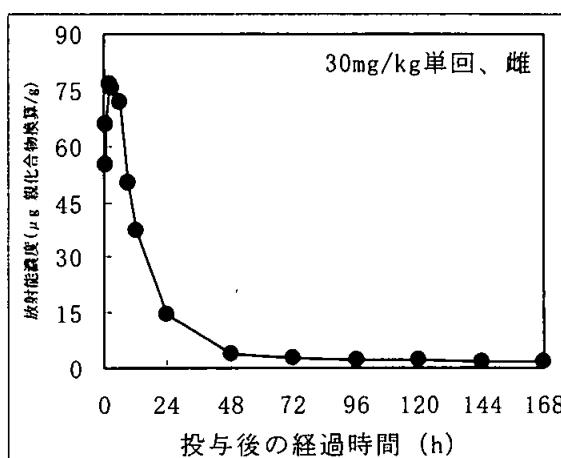
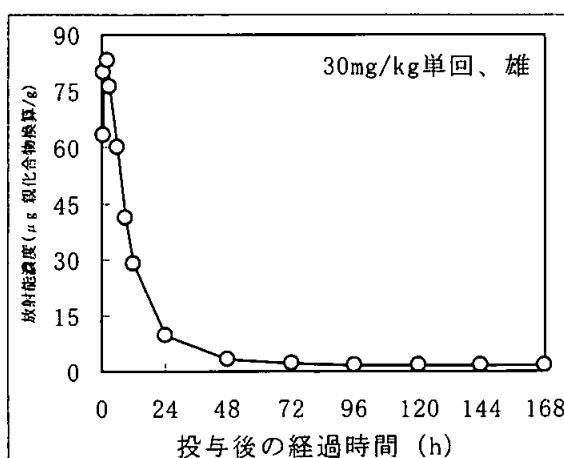


図 2. 30 mg/kg 単回投与したときの血中濃度推移（原報告書Figure 9.113及び9.114）

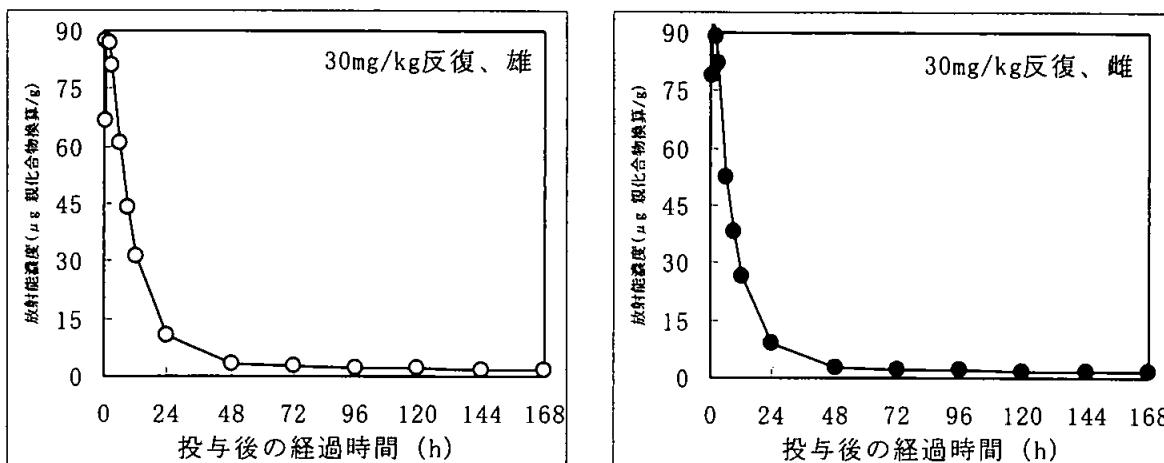


図3. 30 mg/kg反復投与したときの血中濃度推移 (原報告書Figure 9.115及び9.116)

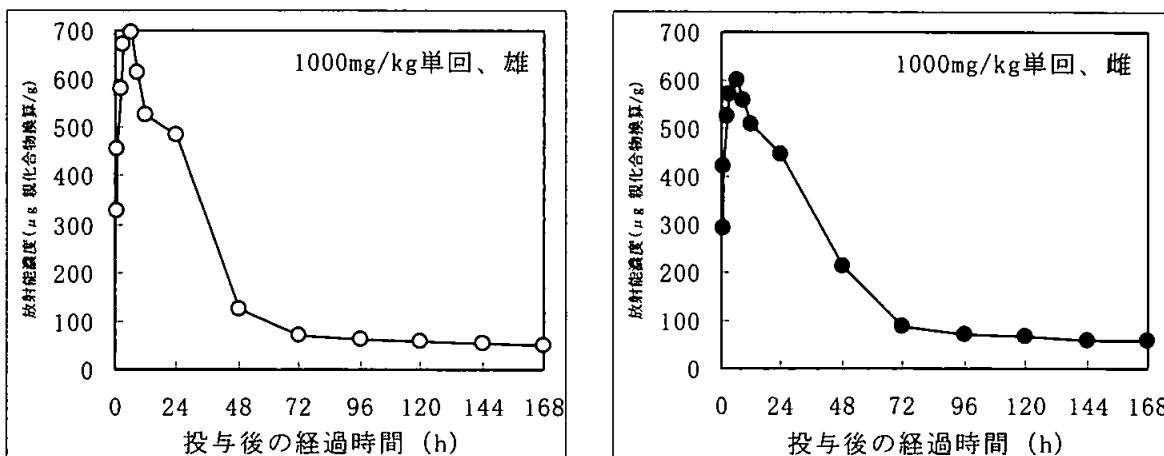


図4. 1000 mg/kg単回投与したときの血中濃度推移 (原報告書Figure 9.111及び9.112)

低用量で投与した場合、血中の放射能濃度は速やかに増加し、投与1-2時間で最高となった。最高濃度の平均値は77-95 μg 親化合物換算/gであった。その後48時間まで速やかに減少し、以後緩やかに消失した。高用量で投与した場合、血中の放射能濃度は6時間で最高となりその平均値は600-698 μg 親化合物換算/gであった。その後72時間まで速やかに減少し、以後緩やかに消失した。

上記の結果を基に血中の放射能濃度推移に関する各パラメータを表9にまとめた。

表9. 血液における薬物動態パラメータ (原報告書Table 9.35, 9.36, 9.39, 9.40, 9.43及び9.44)

投与群	性	Cmax	Tmax	T _{1/2}	AUC
30 mg/kg単回	雄	83.70	1.8	6.38	1625
	雌	90.71	3.3	6.60	2136
30 mg/kg反復	雄	92.42	1.4	6.32	1746
	雌	97.33	1.2	5.49	1610
1000 mg/kg単回	雄	714.9	4.9	23.56	42611
	雌	636.9	12.6	16.31	48421

各パラメータは5匹の個別データの平均値を示した。

各パラメータの単位は、Cmax : μg 親化合物換算/g、Tmax : h、T_{1/2} : h、AUC : μg 親化合物換算*h/g。

雌雄ラットに低用量で投与したときの血中薬物動態は、投与1-3時間後に最高血中濃度 (C_{max} : 84-97 μg 親化合物換算/g) に達し、血中からの放射能消失半減期 ($T_{1/2}$) は、5.5-6.6時間であった。AUCは1610-2136 μg 親化合物換算*h/gであった。高用量投与したときは、5-13時間後に最高血中濃度 (C_{max} : 637-715 μg 親化合物換算/g) に達し、放射能消失半減期 ($T_{1/2}$) は16-24時間であった。また、AUCは42611-48421 μg 親化合物換算* h/gであった。両用量ともに雌雄間差は認められず、反復投与による影響も認められなかった。

②ラット体内における代謝試験（ 標識体経口投与による排泄、分布、血中濃度推移）

資料No. M-2

試験機関：

[GLP対応]

報告書作成年： 1988年

供試標識化合物：

構造式；

化学名； ethyl 5-(4,6-dimethoxypyrimidin-2-ylcarbamoylsulfamoyl)-1-methylpyrazole-4-carboxylate
比放射能；

放射化学的純度； %

非標識体純度； %

供試動物：SD系雌雄ラット（76-186 g、6-11週令）

試験方法：

投与；供試化合物を1% Tween 80水溶液中に懸濁し、投与液を調製した。低用量は30 mg/kg、
高用量は1000 mg/kgとし、5 ml/kgの割合で経口投与した。

用量設定根拠；

試験設計；以下の表に試験設計をまとめた。

投与群	用量	回数・経路	動物数	検討項目	試料採取時間 (h)
A	低用量	単回経口	雌雄各4	排泄	尿：6, 24, 48, 72, 96, 120, 144, 168 糞：24, 48, 72, 96, 120, 144, 168 呼気：24、屍体(屠殺)：168
			雌雄各12	組織分布	3, 24, 72, 168
			雌雄各3	血中濃度推移	投与前, 0.5, 1, 2, 3, 6, 9, 12, 24, 48, 72, 96, 120, 144, 168
B	低用量	非標識体14日間反復 経口及び標識体単回 経口（反復経口）	雌雄各4	排泄	投与群Aの排泄と同様
			雌雄各3	組織分布	168
			雌雄各3	血中濃度推移	投与群Aの血中濃度推移と同様
C	高用量	単回経口	雌雄各4	排泄	投与群Aの排泄と同様
			雌雄各12	組織分布	投与群Aの組織分布と同様
			雌雄各3	血中濃度推移	投与群Aの血中濃度推移と同様

試験項目：

排泄：被験物質を投与後、ラットをガラス製代謝ケージに収容した。動物毎に尿及び糞を冷却受器の中に採取した。呼気は2-エトキシエタノール：エタノールアミン（3:1, v/v）を入れた捕集容器中を通過させた。採取時間毎に餌かすも採取し、ケージは水あるいは水とメタノールで洗浄した。投与168時間後にエーテル麻酔により屠殺し、屍体を分析に供した。

組織分布：被験物質を投与後、ラットを網床のケージに収容した。エーテル麻酔により屠殺し、臓器/組織（骨、骨髓、脳、血液/血漿、脂肪、生殖腺、心臓、腎臓、肝臓、肺、筋肉、脾臓、子宮、屍体、副腎、胰臓、甲状腺、胃、腸管、消化管内容物、眼球及び脳下垂体）を採取した。

血中濃度推移：被験物質を投与後、ラットを網床のケージに収容した。血液をラットの側方静脈からヘパリン処理したヘマトクリット管に採取した。

放射能測定：

全ての生体試料は容量あるいは重量を測定した。

糞及び餌かすはメタノールで抽出し、抽出液は一部をLSCに、残渣は燃焼に供した。肝臓、消化管内容物及び屍体は4倍容量の水で均一磨碎し、一部を燃焼に供した。脂肪、生殖腺、心臓、腎臓、肺、筋肉、脾臓、胰臓、胃及び腸管ははさみで細断し、一部を燃焼に供した。液体試料はその一部をLSCに供した。その他の組織はそのまま燃焼に供した。

分析機器：

液体シンチレーションカウンター（LSC）：液体試料は、シンチレーターと混合して放射能を測定した。

試料燃焼装置：固体試料中の放射能は試料燃焼装置にて燃焼後、トラップした¹⁴CO₂をLSCで測定した。

結果：

排泄；各投与群における168時間までの尿糞中排泄率を表1及び図1に示した。

表1. 各投与群の168時間までの尿糞中排泄率及び屍体残存率（原報告書Table 9.1-9.32）

試料	時間(h)	A群 (30 mg/kg単回)		B群 (30 mg/kg反復)		C群 (1000 mg/kg単回)	
		雄	雌	雄	雌	雄	雌
尿	0-6	24.4	24.8	23.6	23.9	7.3	4.0
	6-24	23.2 (47.6)	26.0 (50.8)	29.1 (52.7)	28.5 (52.4)	17.4 (24.7)	14.7 (18.7)
	24-48	4.0 (51.6)	4.7 (55.5)	6.3 (59.0)	8.0 (60.4)	26.6 (51.3)	22.4 (41.1)
	48-72	0.4 (52.0)	0.5 (56.0)	0.6 (59.6)	0.6 (61.0)	4.0 (55.3)	8.8 (49.9)
	72-96	0.2 (52.2)	0.1 (56.1)	0.1 (59.7)	0.1 (61.1)	0.3 (55.6)	1.1 (51.0)
	96-120	0.1 (52.3)	<0.1 (56.1)	<0.1 (59.7)	<0.1 (61.1)	0.1 (55.7)	0.2 (51.2)
	120-144	<0.1 (52.3)	<0.1 (56.1)	<0.1 (59.7)	<0.1 (61.1)	<0.1 (55.7)	0.1 (51.3)
	144-168	<0.1 (52.3)	ND (56.1)	<0.1 (59.7)	<0.1 (61.1)	<0.1 (55.7)	0.1 (51.4)
	尿合計	52.2	56.1	59.8	61.1	55.8	51.4
糞	0-24	21.6	9.3	17.3	25.2	12.2	4.0
	24-48	11.1 (32.7)	23.0 (32.3)	17.0 (34.3)	10.2 (35.4)	17.5 (29.7)	18.6 (22.6)
	48-72	4.7 (37.4)	2.5 (34.8)	2.1 (36.4)	1.1 (36.5)	7.0 (36.7)	5.9 (28.5)
	72-96	1.4 (38.8)	0.2 (35.0)	1.1 (37.5)	0.5 (37.0)	2.9 (39.6)	4.0 (32.5)
	96-120	0.3 (39.1)	<0.1 (35.0)	0.3 (37.8)	0.2 (37.2)	0.4 (40.0)	1.6 (34.1)
	120-144	0.2 (39.3)	<0.1 (35.0)	0.3 (38.1)	<0.1 (37.2)	0.1 (40.1)	0.3 (34.4)
	144-168	<0.1 (39.3)	<0.1 (35.0)	0.1 (38.2)	0.2 (37.4)	<0.1 (40.1)	0.2 (34.6)
	糞合計	39.4	35.1	38.2	37.5	40.1	34.6
	ケージ洗浄	6.6	9.1	5.9	5.4	5.2	15.1
呼気	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
	餌かす	<0.1	ND	<0.1	ND	<0.1	<0.1
	屍体	ND	ND	ND	<0.1	1.2	1.3
合計		98.2	100.3	103.9	104.0	102.3	102.4

数値は投与放射能に対する比率(%)として示す。（ ）内は累積排泄率を示す。ND : <0.01

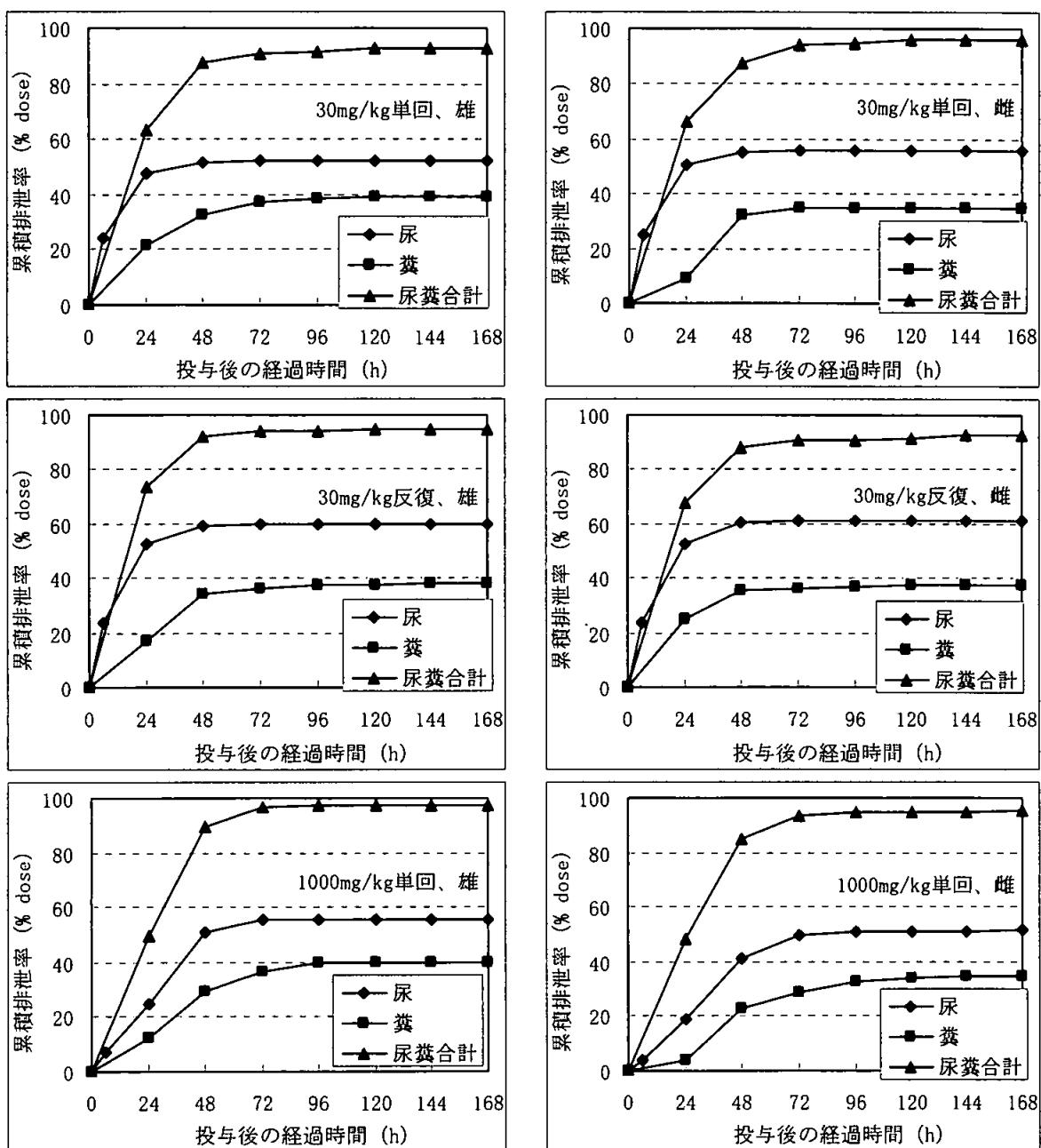


図 1. 各群の168時間までの尿糞中累積排泄率 (原報告書Figure 9.89-9.94)

168時間までに尿中に排泄された放射能は51-61%、糞中に排泄された放射能は35-40%であり、168時間での屍体中放射能は1.3%以下であった。全体の回収は98-104%であった。尿及び糞中放射能の大部分は72時間までに排泄された。用量間及び雌雄間に差は認められず、投与回数による影響も認められなかった。

組織分布；各投与群における各組織中濃度及び分布率を表2～6に示した。

表2. 雄ラットに30 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.65及び9.67)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	14.7	0.02	2.2	<0.01	ND	ND	ND	ND
血液	57.2	-	6.1	-	<0.1	-	ND	-
骨髓	15.4	-	1.6	-	ND	-	ND	-
骨	6.9	-	0.8	-	ND	-	ND	-
脳	1.9	0.07	0.2	0.01	ND	ND	ND	ND
屍体	11.9	31.50	1.4	3.97	ND	ND	ND	ND
眼球	6.5	0.03	1.1	<0.01	ND	ND	ND	ND
脂肪	9.7	-	1.1	-	ND	-	ND	-
消化管内容物	67.2	22.29	22.5	5.31	0.9	0.29	0.2	0.08
生殖腺	13.4	0.59	1.7	0.09	ND	ND	ND	ND
心臓	24.4	0.36	2.6	0.04	ND	ND	ND	ND
腸管	25.9	4.94	4.3	0.84	0.1	0.03	ND	ND
腎臓	23.0	0.76	2.4	0.08	ND	ND	ND	ND
肺	28.9	0.62	2.9	0.06	ND	ND	ND	ND
肝臓	47.1	6.71	5.0	0.98	ND	ND	ND	ND
血漿	107.4	-	11.6	-	0.1	-	ND	-
脾臓	16.5	0.16	1.6	0.01	0.2	<0.01	ND	ND
脳下垂体	11.9	ND	8.8	<0.01	ND	ND	0.4	ND
筋肉	8.0	-	0.9	-	ND	-	ND	-
脾臓	10.5	0.10	1.1	0.01	<0.1	ND	ND	ND
胃	24.1	0.68	1.5	0.04	0.3	0.01	<0.1	<0.01
甲状腺	21.3	ND	4.2	<0.01	ND	ND	0.1	ND
総残留率		68.83		11.44		0.33		0.08

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表3. 雌ラットに30 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.66及び9.68)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	16.2	0.02	0.9	<0.01	0.2	ND	0.1	ND
血液	52.7	-	5.6	-	0.1	-	ND	-
骨髓	16.8	-	0.8	-	ND	-	ND	-
骨	7.0	-	0.6	-	ND	-	ND	-
脳	1.6	0.07	0.1	<0.01	ND	ND	ND	ND
屍体	10.8	29.10	1.2	3.36	ND	ND	ND	ND
眼球	7.0	0.04	0.4	<0.01	ND	ND	0.1	<0.01
脂肪	12.0	-	1.1	-	ND	-	ND	-
消化管内容物	66.9	19.89	25.6	6.17	1.5	0.48	0.2	0.07
生殖腺	28.3	0.04	2.0	<0.01	<0.1	ND	0.1	ND
心臓	22.4	0.31	1.4	0.02	ND	ND	ND	ND
腸管	31.6	4.70	3.8	0.67	0.4	0.07	<0.1	<0.01
腎臓	24.6	0.78	1.8	0.06	<0.1	<0.01	ND	ND
肺	27.1	0.54	1.7	0.04	<0.1	<0.01	ND	ND
肝臓	58.5	8.20	4.6	0.87	ND	ND	ND	ND
血漿	104.8	-	7.4	-	0.2	-	ND	-
脾臓	15.7	0.15	1.0	0.01	ND	ND	ND	ND
脳下垂体	18.3	ND	1.0	ND	ND	ND	ND	ND
筋肉	7.0	-	0.5	-	ND	-	ND	-
脾臓	11.0	0.09	0.6	0.01	ND	ND	ND	ND
胃	15.5	0.31	1.0	0.03	0.4	0.02	ND	ND
甲状腺	23.7	0.01	1.9	<0.01	ND	ND	ND	ND
子宮	23.8	0.20	1.8	0.06	<0.1	ND	ND	ND
総残留率		64.45		11.30		0.57		0.07

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表4. 雌雄ラットに30 mg/kg反復投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.85-9.88)

試料	雄 168 h		雌 168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	0.245	<0.001	ND	ND
血液	ND	-	ND	-
骨髓	ND	-	ND	-
骨	ND	-	0.027	-
脳	ND	ND	0.144	0.005
屍体	ND	ND	ND	ND
眼球	ND	ND	ND	ND
脂肪	0.033	-	ND	-
消化管内容物	0.690	0.122	0.790	0.155
生殖腺	0.037	0.001	ND	ND
心臓	ND	ND	ND	ND
腸管	ND	ND	0.109	0.015
腎臓	ND	ND	ND	ND
肺	ND	ND	ND	ND
肝臓	0.073	0.012	0.165	0.023
血漿	ND	-	0.021	-
脾臓	ND	ND	0.104	0.001
脳下垂体	ND	ND	ND	ND
筋肉	0.039	-	0.086	-
脾臓	ND	ND	ND	ND
胃	0.083	0.001	0.315	0.007
甲状腺	ND	ND	ND	ND
子宮	-	-	0.036	<0.001
総残留率		0.136		0.206

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表5. 雄ラットに1000 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.45及び9.47)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	263	ND	307	0.01	ND	ND	ND	ND
血液	436	-	619	-	8	-	ND	-
骨髓	177	-	228	-	ND	-	ND	-
骨	62	-	67	-	ND	-	ND	-
脳	58	0.05	109	0.09	ND	ND	ND	ND
屍体	138	10.21	249	17.81	10	0.79	ND	ND
眼球	148	0.01	229	0.02	3	ND	ND	ND
脂肪	108	-	224	-	ND	-	ND	-
消化管内容物	9024	78.66	5477	31.62	87	0.72	ND	ND
生殖腺	145	0.18	239	0.26	ND	ND	ND	ND
心臓	188	0.06	339	0.13	ND	ND	ND	ND
腸管	545	2.00	831	2.97	24	0.11	ND	ND
腎臓	263	0.20	652	0.52	2	<0.01	ND	ND
肺	273	0.11	476	0.23	1	<0.01	ND	ND
肝臓	303	1.21	432	1.42	8	0.04	ND	ND
血漿	612	-	916	-	15	-	ND	-
脾臓	176	0.06	342	0.06	ND	ND	ND	ND
脳下垂体	460	ND	221	ND	60	ND	13	ND
筋肉	113	-	187	-	ND	-	ND	-
脾臓	142	0.03	251	0.05	ND	ND	ND	ND
胃	7195	4.44	6198	4.15	9	0.01	ND	ND
甲状腺	475	ND	381	ND	17	ND	ND	ND
総残留率		97.22		59.34		1.67		<0.01

濃度はμg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

表 6. 雌ラットに1000 mg/kg単回投与した時の各組織中濃度及び分布率(原報告書Table 9.46及び9.48)

試料	3 h		24 h		72 h		168 h	
	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率	濃度	分布率
副腎	133	ND	243	0.01	ND	ND	3	ND
血液	335	-	502	-	14	-	ND	-
骨髓	114	-	173	-	ND	-	ND	-
骨	43	-	34	-	ND	-	ND	-
脳	101	0.09	73	0.06	ND	ND	ND	ND
屍体	405	28.03	172	12.67	24	1.88	7	0.54
眼球	69	0.01	169	0.02	5	<0.01	ND	ND
脂肪	53	-	99	-	ND	-	ND	-
消化管内容物	11354	81.76	8839	31.49	214	1.37	8	0.08
生殖腺	184	ND	308	0.01	ND	ND	ND	ND
心臓	129	0.05	269	0.09	3	<0.01	ND	ND
腸管	345	1.74	1135	4.21	53	0.22	ND	ND
腎臓	166	0.14	347	0.26	8	0.01	ND	ND
肺	177	0.08	293	0.14	4	<0.01	ND	ND
肝臓	239	1.02	363	1.26	16	0.08	ND	ND
血漿	568	-	770	-	28	-	ND	-
脾臓	99	0.03	215	0.05	2	ND	ND	ND
脳下垂体	179	ND	309	ND	ND	ND	ND	ND
筋肉	58	-	123	-	ND	-	ND	-
脾臓	84	0.02	189	0.04	ND	ND	ND	ND
胃	8330	5.43	8068	4.68	29	0.03	ND	ND
甲状腺	162	ND	342	ND	5	ND	ND	ND
子宮	210	0.05	278	0.06	15	<0.01	ND	ND
総残留率		118.45		55.05		3.59		0.62

濃度は μg 親化合物換算/g、分布率は投与放射能に対する比率(%)を示す。

投与 3~168 時間後における組織内放射能濃度は、単回低用量群では投与 3 時間後の組織が最高値を示した。その後経時的に減少し、168 時間後では概ね検出限界以下のレベルであった。反復低用量群も 168 時間後の組織内濃度は単回と類似していた。高用量群では 3~24 時間にわたって組織内濃度が最高値を示した。その後速やかに減少し、168 時間後ではほとんどの組織内濃度が検出限界以下となった。投与 3 時間後の単回低用量において最も濃度が高かったのは血漿であり、105-107 μg 親化合物換算/g であった。投与 3 時間後の高用量では消化管内容物の濃度が最も高く、9024-11354 μg 親化合物換算/g であった。胃及び腸管を除くと、高用量の血漿中濃度も高く、568-612 μg 親化合物換算/g であった。

分布率では全体的に屍体の比率が高く(3時間後: 10-32%)、その消失パターンは用量及び雌雄に関係なく類似しており、168時間後には全て1%未満となった。また、消化管系以外で比率が高かった肝臓は、3時間後で1-8%を示し、168時間後では検出限界レベルまで減衰した。

血中濃度推移；各投与群における血中放射能濃度推移を表 7 及び図 2、3、4 に示した。

表 7. 各投与群の血中濃度推移 (原報告書Table 9.33, 9.34, 9.37, 9.38, 9.41及び9.42)

採取時間 (h)	30 mg/kg 単回		30 mg/kg 反復		1000 mg/kg 単回	
	雄	雌	雄	雌	雄	雌
投与前	0.04	ND	ND	ND	ND	ND
0.5	70.53	85.2	82.95	82.0	221.7	353.5
1	84.43	92.8	94.25	96.6	337.0	486.4
2	77.53	93.2	88.28	97.8	443.9	579.2
3	67.53	82.5	79.54	93.5	468.5	568.8
6	46.25	56.7	57.59	70.8	497.5	591.9
9	29.18	38.4	38.26	51.7	425.8	503.4
12	21.02	21.2	41.58	27.1	416.3	428.4
24	6.22	7.4	15.23	7.3	402.7	455.5
48	0.58	0.9	1.03	1.8	96.3	191.5
72	0.05	0.1	0.17	0.3	6.8	18.7
96	ND	ND	0.08	0.1	ND	2.3
120	ND	ND	ND	ND	ND	ND
144	ND	ND	ND	ND	ND	ND
168	ND	ND	ND	ND	<0.1	ND

濃度 (μg 親化合物換算/g) は5匹の平均値として示した。

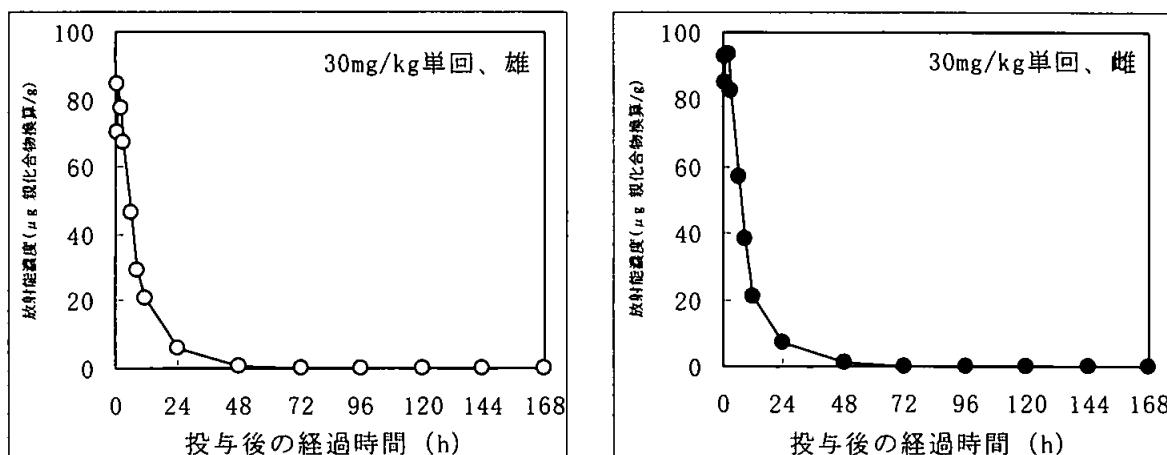


図 2. 30 mg/kg 単回投与したときの血中濃度推移 (原報告書Figure 9.97及び9.98)

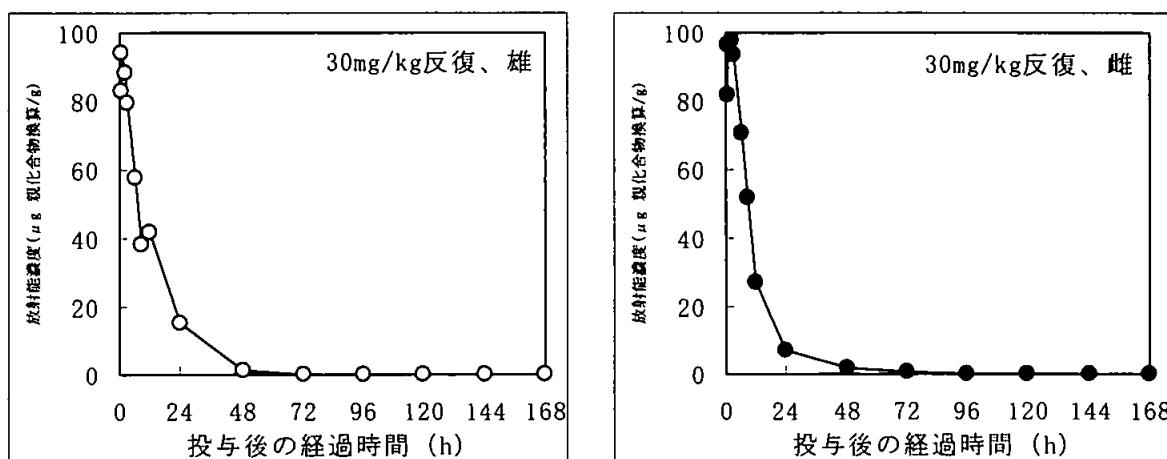


図 3. 30 mg/kg 反復投与したときの血中濃度推移 (原報告書Figure 9.99及び9.100)

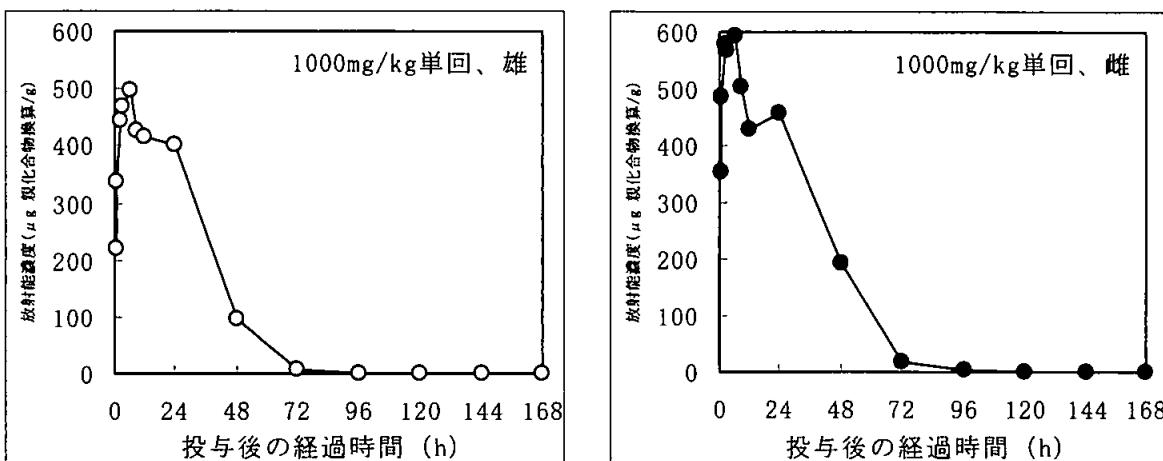


図4. 1000 mg/kg単回投与したときの血中濃度推移 (原報告書Figure 9.95及び9.96)

低用量で投与した場合、血中の放射能濃度は速やかに増加し、投与1-2時間で最高となった。最高濃度の平均値は84-98 μg 親化合物換算/gであった。その後48時間まで速やかに減少し、以後緩やかに消失した。高用量で投与した場合、血中の放射能濃度は6時間で最高となり、その平均値は498-592 μg 親化合物換算/gであった。その後72時間まで速やかに減少し、以後緩やかに消失した。

上記の結果を基に血中の放射能濃度推移に関する各パラメータを表8にまとめた。

表8. 血液における薬物動態パラメータ (原報告書Table 9.35, 9.36, 9.39, 9.40, 9.43及び9.44)

投与群	性	Cmax	Tmax	T _{1/2}	AUC
30 mg/kg単回	雄	84.43	1.0	7.049	821.4
	雌	94.60	1.7	7.995	971.5
30 mg/kg反復	雄	95.72	1.3	9.285	1267
	雌	102.20	1.3	9.266	1162
1000 mg/kg単回	雄	497.5	6.0	8.104	17360
	雌	642.3	10.7	8.460	22066

各パラメータは5匹の個別データの平均値を示した。

各パラメータの単位は、Cmax : μg 親化合物換算/g、Tmax : h、T_{1/2} : h、AUC : μg 親化合物換算*h/g。

雌雄ラットに低用量で投与したときの血中薬物動態は、投与1-2時間後に最高血中濃度 (Cmax : 84-102 μg 親化合物換算/g) に達し、血中からの放射能消失半減期 (T_{1/2}) は、7.0-9.3時間であった。AUCは821-1267 μg 親化合物換算*h/gであった。高用量投与したときは、6-11時間後に最高血中濃度 (Cmax : 498-642 μg 親化合物換算/g) に達し、放射能消失半減期 (T_{1/2}) は8.1-8.5時間であった。また、AUCは17360-22066 μg 親化合物換算*h/gであった。両用量ともに雌雄間差は認められず、反復投与による影響も認められなかった。